

第八回講義への学生のコメント

この度の授業では、ロゴス、ヌースについて学んだ。要点は、ロゴスとはかつては数えることであったが、意味が広がり人に話すという意味になったこと、そしてヌースとは、理解に基づき何かを作り出すという意味であるということだ。また、理解することが間近に立ってよく見ることだとも学んだ。

ここで疑問なのが、現代で使われている「理解する」という言葉にもこの「間近に立ってよく見る」という意味が含まれているのかということだ。広辞苑で理解するという言葉を調べてみると、2つの意味が出てきた。

一つ目は、人の気持ちや立場が分かることである。これは、確かに相手の気持ちをわかるためには、立場を置き換えて捉えるという点で、間近に立ってという意味につながる。

しかし二つ目の、物事の道理を悟り知ること、意味を飲み込むこと、これは間近に立ってよく見るという意味につながらない。

反対意見として、飲み込むとは考えることであり、考えるとは調べ書き書き直すことであるため「よく見る」につながるという意見もある。だが、ここでいう理解するの用例として、教科書のこの文章を理解するなどがあげられ、自ら動いてというよりはその場で客観的にわかることである。

したがって、現代の日本語「理解する」の意味が全て「間近に立ってよく見る」につながらないのである。

近代哲学における理性とは、理由をつけて推論する力や、何を推論するべきかを判断する力のことである。それらの能力は十分な情報を得て、その情報の中から妥当な価値判断をすることや別の立場や見方からの情報を得ることによって身に着けることができる。

哲学用語の中で日本語で理性と訳される語はギリシア語やラテン語、英語にも存在し、中でもギリシア語ではヌースもロゴスとともに理性と訳される。ヌースはそもそも目的や意図という意味であり、目的を考えるという意味で使われる。動詞のノエオーは目的をもって考えたり、行動したりすることを言う。また、理性のほかに知性とも訳される。対してロゴスはそもそも理由や根拠という意味を持ち、動詞のレゴーンは数える、計算するといった意味でも使われる。理性以外に論理と訳されることもある。

コメント [y1]: 「間近で見る」とは、英語の *understand* やギリシア語のエピステーメーの語源です。日本語の「理解」は、読んで字のごとく「理を解すること」でしょう。

理性(思考力)は、情報を得て、妥当な価値判断をして、別の立場、見方から情報を得ることで育てることができる。ギリシア語、ラテン語、英語の様々な言葉を「理性」と訳してきたが、その「理性」と訳された語が**多く**混乱させてしまっている。理性や知性と訳された「ヌース」の元の意味は目的を考えること、ヌースの動詞の「ノエオー」の意味は区別すること、識別することだ。理性や論理と訳された「ロゴス」の意味は言葉に関わるもの全て、ロゴスの動詞の「レゴー」の意味は数えること、計算することだ。ヌースとロゴスという言葉はギリシア語だが、古代ギリシアにおいてロゴスは機械的な計算**機**という意味で、ヌースは何か作り出す力のことをいう。近代の哲学における理性と知性の逆転が見られるが、**これは日本人が多くの言葉から理性と知性という意味を抽出した結果、言葉の意味が混ざってしまい今では逆転してしまった。**

コメント [y2]: 単に多いだけでなく、意味が重なっていたり、時には反対になったりしている。

コメント [y3]: 哲学史上、17~8世紀ごろに逆転したので、日本人は関係ありません。

ギリシア語でヌースとは、日本語で理性、知性と訳される。動詞にすると新しいことを思いつくという意味を持つ。目的を持つという意味もある。

また、ギリシア語でロゴスとは、日本語で理性、論理と訳される。動詞にすると、レゴーとなる。レゴーとは第一に床に並べるという意味を持っており、次に集める、次に声に出して数を数える、最後に話すの意味を持つ。このことからわかるように理性とは、会話の中で育つものなのだ。

ラテン語でインテレクトゥスとは、日本語で知性と訳される。動詞にすると間を選ぶ、読むという意味を持つ。理性はラテン語でラチオだ。これも数える、計算するという意味を持つものだ。

今回の講義の重要点は、ギリシア語におけるロゴスとヌースの違いであった。ロゴスは、説得や論証の手段でレトリックのようなものだ。たとえ嘘だとしても相手を納得させることができればいいのだ。つまり真理を追究するものではない。一方で、ヌースとは、理解し理解に基づいて何かを作り出す力である。哲学者は、真理を追究するべきだと考えたのだ。しかし、アリストテレスは対話は不要と考え、自分一人で解決しようとしていたため、**ディアレクティケー（弁証術、対話術）の力をヌースを信じていなかった。**

今回の授業は、ギリシア語・ラテン語・英語の訳語から、「理性」「知性」「悟性」について考える内容だった。まず、日本語訳では「理性」や「知性」という意味であるギリシア語の「ヌース」について。そもそもの意味は新しいことを創り出すという意味での「考え

る」であったという。

また、その動詞である「ノエオー」には「思いつく」という意味があり、新たなものを生み出すための根底にあるものだった。つまり、「新たなものを創りだしたい」→「考えて、アイデアを思いつくだけの知識が必要」→「知性」というような連想ゲームの果てにこの日本語訳にたどり着いたのだろう。ただ、日本語訳で「知性」にあたる言葉はラテン語にもあって、それは「インテレクトゥス」である。動詞の intel-lego(=「間+選ぶ・読む」)からきており、日本語で言う「行間を読む」という意味に近い。「行間を読む」という行為にも「知性」が必要ということで「知性」という訳が付いたのかもしれないが、少々こじつけのような感じがする。私の中では「ヌース」がより「知性」という訳がしっくりあてはまる。

次に、日本語で「論理」という意味のギリシア語「ロゴス」について。もともとは「考えを表現したもの全て」というややざっくりとした意味がある。加えて、その動詞である「レゴー」には「寝かせるために横たえる、あやす」や「数を数える」という意味があり、口に出して数えるということから、「話す」「言う」と意味に転じた。

紀元前の人々には数の概念が一番理解しやすく、共有しやすいものだった可能性がある。確かに、目で見てすぐにはわかるのはその物が一体いくつあるのか、ということであり、海外で数を伝えたくてでもその国の言葉では表せないときには指を立てて、その立てた指の本数で数は伝わる。

今回の授業は正直なことを言うと、頭が混乱してよく理解できていないが言語から哲学を考えたことがなかったため、新たな経験だった。

日本語で「理性」はギリシャ語の「ロゴス」の訳語とされている。従って、「ロゴス」を表すラテン語と英語の和訳も「理性」となる。しかし、「理性」はギリシャ語の「ヌース」の訳語としても使われている。「ヌース」を表すラテン語や英語の訳は「知性」、「悟性」となっていて、訳語が混乱している。

そもそも「ヌース」、「ロゴス」の意味は何だろうか。まず、「ヌース」は「目的」、「考え」を意味し、その動詞形に当たる「ノエオー」は「よく見て識別する」、「考え出す」を表す。一方、「ロゴス」は言葉に関わるもの全てを表し、様々な派生を持つ。古代ギリシャでは「ロゴス」は説得や論証の手段であり、計算の道具的な意味がある。「ヌース」は理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことである。日本語では「理性」と2文字で表されるが、元を辿れば「ロゴス」と「ヌース」はそれぞれ違う意味を持っている。情報を得る際、単語がどのような意味、由来を持つのか調べ、理解することが必要である。

1.十分な情報を得て-その情報から妥当な価値判断をし-別の立場や見方から情報を得ることによって理性は育つ-。ヌースを日本語にすると理性や知性ロゴスは-理性や論理アイステーシスは感覚や知覚にそれぞれ翻訳される。哲学は明治時代に日本に入ってきて翻訳されたがギリシャ語から英語にしたりするときには微妙にニュアンスが違ってくる。-また人は-知り理解し考える-ので-順序としては-ものを見て-情報を-判断し-行動に-うつす-。古代ギリシャ-における-ロゴスの役割は-説得や論証などの-手段-所謂-計算の道具的な存在 だった-ヌースは-理解し-理解に基づいて何かを作り出す力。

2.授業の最後の方で先生はキリスト教とイスラム教はすごくよく似ているのにも かわら ら ず か か わ ら ず イスラム教に関してはあまりいいイメージを持っていない人が多いとおっしゃっていましたがその背景には何があると 思いますか。

3 私はキリスト教人口が多いという点とやはりキリスト教を信仰している国々の中には先進国が多いという点にあると 思います。でもこれはあくまで経済的な考え方なので今回丁寧に授業でこの話題ができたので哲学的な見解を聞いてみたいと 思い 質問させていただきました。

「思う」はやめましょう。質問のしっぱなしはやめましょう。
文中に不可解な半角スペースが散在しています。そのかわり、○が打たれていません。なぜでしょうか？

今回の授業では、ヌースやロゴス、アイステーシスといった哲学的な用語を、そのそもそもの意味にしたがって見ていき、それによって「古代ギリシャでは、日常的な用語を派生させていって哲学的な用語にしていった」ということを理解した。

日本語で「理性」「知性」と訳される「ヌース」という語は英語では「mind」「purpose」「resolve」等の意味であり、考えることそのものであった。「ロゴス」というのは元々「数える」ということであり、計算が基盤であった。そこから数えて「口に出す」ことから「言及する」の意味に繋がり、理性や論理といった日本語が当てられるようになった。これは後々の説得や論証の手段を表す語として使われ、ソフィスト達の説得術に繋がった。そういった派生の例としては、巨大なピアノで知られる「オルガン」という言葉は元々「複雑な道具」という意味になり、作られた当時最も複雑な機械であったために「オルガン」とつけられたのが始まりであった。

ヨーロッパ 哲学文明 というのはギリシャ由来ではない。その根本はキリスト教であり、アリストテレスを初めとするギリシャ哲学はイスラーム経由でもたらされた。ギリシャから 小アジア や アフリカ大陸 に渡りイスラームに伝承、イスラームでその研究がなされた後、ヨーロッパに伝わったものである。

イスラームは古来よりキリスト教と対立し対立し抗争を繰り返してきたが、崇める神などの根本的な考え方は同じであり、コーランに「啓典の民」とある通り、イスラームにもキリスト教は受容すべき宗教とされている。

今日の講義は哲学用語の解説が主だった。翻訳の経緯やギリシア語、ラテン語から前回の講義にも出てきた「理性」などの哲学用語の意味を捉え直した。まず、日本語では理性、あるいは知性と訳されるギリシア語のヌースは、英語では **mind**、精神の意味を持っていたが、そこから派生して **a thought, purpose, resolve** というような考えや意図、目的などを意味するようになった。ヌースのような抽象名詞には原型となる動詞があり、ヌースの原型はノエオーである。ノエオーは区別する、目的とする、あるものをそういうものであるとみなすなど、物事を判断するような意味合いで使われる動詞である。これに対して日本語で理性を表すロゴスは考えを表現した言葉、あるいは言葉に関わる全てのものを表すような抽象名詞である。ロゴスだけでは意味を捉えづらいが、動詞のレゴーに注目すると、横たえるという原義から、並べる、数える、そして数え上げることから言うこと事体に意味が変わっていったのが分かる。

次に古代ギリシア語からラテン語への翻訳の経緯について。ヌースが翻訳されたラテン語のインテレクトゥスは動詞が **intellego** となり、直訳すれば「間を選ぶ、読む」というようなロゴスに近い意味になる。しかし、この語は英訳される時、**discern** など、ヌースに近い意味も持つ。これは古代ギリシアの著作たちが難解だったため、翻訳の過程で混乱が生じたと考えられている。この混乱が日本語でヌースを翻訳する際にも引き継がれてしまった。またロゴスのラテン語訳のラチオもその動詞形にヌースとロゴスの意味が混在している。

最後にロゴス、ヌースの古代ギリシアにおける扱いについて説明があった。ロゴスとは論証であり、ある論を証明する手法そのものだった。アリストテレスはロゴスに関わるものたちを「ロギコス」と呼び、それは彼の著作にも見られるようにオルガノン、つまりは論を進めるための道具あるいは機械的に作動する演算装置を意味した。このロギコスは論理学を意味する **Logic** の原義である。対してヌースは何を論とするか判断する力あるいは物事を理解したうえで新たな論を作る力である。ロゴスはヌースを進めるための補助的な役割にある。

前回のコメントで字数が足りなかったため、続きを記す。前回のコメントでは厚生労働省の社会福祉費用に関するデータを示した。確かに、一部の人が言うように社会保障関係費の中で年金の分野にかかる費用はかなり大きいと言える。しかし、安易に年金支給額を減らせという主張は、その主張をする人の将来の生活が不安定なものになりかねない。さらに、年金支給年齢の引き上げも議論されている。財務省は4月11日の財政制度等審議会

コメント [y4]: 井出栄策『日本財政 転換の指針』岩波新書、宮本太郎『福祉政治』有斐閣、佐藤滋他『租税抵抗の財政学』岩波書店、などを読んでみましょう。

の議論の中で、年金支給開始年齢の引き上げを要求した(SankeiBiz,2018/04/12)。財務省の『新たな財務健全化計画に関する建議』の書類では、「支給開始年齢の引き上げと支給開始年齢の柔軟化は矛盾するものではない」、「ある時点で財源を節約しても、これは後年度において使われることとなり、直接的に財政負担を減らす効果が期待できる訳ではない」(財務省,2018/05/23,p.31)などと記されているが、支給開始年齢を引き上げる時点で柔軟さは低下するし、近頃の政権を取り巻く諸々の不祥事を見ても節約された財源が適切に使われるか怪しい。しかし、それでもなお支給開始年齢が引き上げられれば、高齢者の暮らしはより厳しいものなるだろう。健康寿命というものがある。人が生まれてから死ぬまでが平均寿命であるのに対して、健康寿命とは活動を老衰や癌などの大病で生活を大きく制限されず、健康上問題のない状態で生活できる期間のことだ。少し古いデータだが労働省の『平成28年度版厚生労働白書』では2013年の男性の平均寿命が80.21歳、健康寿命が71.19歳であり、女性の平均寿命は86.61歳、健康寿命が74.21歳である。現行の年金支給開始年齢は原則65歳。かつては年齢支給額60歳で定年退職して、老後を過ごすことができただろう。しかし、年金支給年齢が引き上げられれば上げられるほど、仕事をしなければならなくなる。健康寿命の限界が近くなるまで働き続けることは肉体的にも、精神的にも厳しいものがある。働きぬいてすぐに病院生活になることを嫌がる人もいる。だが、それでも年金があったほうが医療、介護などの費用をどうにか工面しやすい。年金の支給減額、制度廃止を訴える人は、まず、ただでさえ高齢者になると健康に生き続けることが難しい現状を考慮してほしい。

参考文献・ウェブページ一覧

1)厚生労働省「社会保障給付費の推移」

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12600000-Seisakutoukatsukan/0000128233.pdf>,2018/6/2 アクセス.

2)厚生労働省「平成28年版厚生労働白書」

<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/backdata/01-01-01-10.html>,2018/6/2 アクセス.

3)SankeiBiz,4/12記事,「年金支給開始年齢引き上げ 財務省提案 社会保障支出を効率化」

<https://www.google.co.jp/amp/s/www.sankeibiz.jp/macro/amp/180412/mca1804120500006-a.htm>,2018/6/2 アクセス.

4)財務省「新たな財政健全化計画等に関する建議」

https://www.mof.go.jp/about_mof/councils/fiscal_system_council/sub-of_fiscal_system/report/zaiseia300523/01.pdf,2018/6/2 アクセス.

今回の授業は主に、言葉の意味について学んだ。それぞれの言語で、同じ日本語訳の言

葉が複数存在したり、訳語の混乱があった。たくさんの言語が存在する中で、訳の齟齬(→?)が合わないことは必ず出てくる。そういう時に、どう対処しているのかが**気になった**。たとえば、一つの英語の言葉があったとする。その言葉を日本語に訳したいけど、その言葉が使われているような同じ意味の言葉が日本語には存在しなかったら、辞書などではどう表記されるの**だろうか**。辞書に載っている言葉なら、訳が出てこないことはないだろうから、ぴったり意味の合った言葉じゃなくても、一番意味が近い言葉が訳にあてられているの**だろう**。

そういう部分があるから、言語は難しい。言葉は進化していくものなので、これから新しい言葉がたくさん生まれたり、今使われている言葉が消えていってしまうかもしれない。今は特に、グローバル化が進んでいて、一つの言語が世界中で使われる日が来るかもしれないから、言葉の意味をしっかりとらえることが大切である。

疑問の言いはなしはやめましょう。「～気になる」といった主観的表現、「～だろう」などの憶測はやめましょう。

理性とは対話の中で育つものである。十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、そして別の立場や見方からの情報を得ることによって理性は育つのだ。ちなみに、近代哲学における理性とは、理由をつけて推論する力である。計算能力とも言える。例えば、計算は、必ず決まった答えがあって、誰がしても同じ結果になるはずのものだ。人それぞれ答えが違うということはない。そして、アリストテレス以来の「知性 intellect」とは、何を推論すべきかを判断する能力を含んでいる。近代哲学における知性と理性の逆転が起こっているのだ。またヌース、ロゴス、インテレクトゥスなどの、訳語の混乱も起こっている。古代ギリシアにおけるロゴスとは、説得や論証の手段ということだった。アリストテレスのロギコスとは、機械的に作動する演算装置という意味である。また、ヌースは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力ということである。そして、アリストテレスにおけるロゴスは、論証であり、ヌースは、何らかの前提を把握する能力である。

今回の授業では、哲学用語である「ヌース」と「ロゴス」の意味を学習した。これらはギリシャ語である。「ヌース」とは、目的や意図である。これを具体的に表している動詞が「ノエオー」である。意味は、単にものを見るのではなく、区別ができるようしっかり見ることだ。そして、新しいものを工夫して創るということだ。「ロゴス」の元来の意味は、考えを表現した言葉のことである。これを具体的に表している動詞は「レゴー」である。

意味は、並べて、アレンジを加え、それを集めて、口に出して数え、人の伝えることだ。このように、「ヌース」や「ロゴス」の意味は抽象的だが、概念は動詞にあり、おおよそ具体的に示されている。古代ギリシャにおける「ヌース」は理解し、それに基づいて何かを作る出す力と認識されていた。「ロゴス」は、説得や論証の手段という意味であった。つまり、計算である。

今回の授業は、哲学用語について学んだ。

哲学において、**理性は対話の中で育つ**とされる。十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別の立場や見方からの情報を得ることによって理性(思考力)は育つ。近代哲学における**理性(Reason)**は理由をつけて推論する力や計算力を意味した。アリストテレス以来の「**知性(Intellect)**」は何を推論すべきかを判断する能力を含むようになった。今回の授業では、その近代哲学における「**知性と理性の逆転**」がテーマだった。

日本語訳で「**理性**」と訳されるのは、ギリシャ語では「ヌース」、ラテン語では「ラチオ」、英語では「**Reason**」である。しかし、ギリシャ語とラテン語で「**理性**」の意味のギリシャ語は「**ロゴス**」であるのだ。また、英語の「**Understanding**」は日本語で「**知性**」と「**悟性**」と訳されるが、カントが先に「**Understanding**」を「**Verstand**」を**悟性知性**と訳したため、それに対応する英語の **Understand** も長年「**悟性**」と訳されていた。近年、カント以前の哲学者の言う **Understanding** を「**悟性**」と訳すのはやめて、「**知性**」と訳すことになっているというのは後から訳されたものである。ひとつの単語に意味の異なる二つの訳があてられているのだ。

そもそもギリシャ語の「ヌース」は、「目的や意図」のことであり、その動詞の「**ノエオー**」は「目的を考えて、新しいものを作り上げようとする」ことである。また、「**ロゴス**」は「歴史、考え、お話」など、考えを言葉で表現したものことである。その動詞の「**レゴ**」は、「床に置く、寝かせる、横たえる」以外にも、「拾う、集める」、そして秩序だつて並べて、「数を数える」という意味がある。ラテン語の「**インテレクトゥス**」は、その動詞の「**Intel-lego**」から分かるように「行間を読む、わかる」という意味であり、「ラチオ」は、「計算する、足し算」という意味である。哲学用語でよくわからない単語があれば、その動詞形を見れば理解しやすくなる。

古代ギリシャにおける「**ロゴス**」と「**ヌース**」について。「**ロゴス**」は説得や論証の手段のことである。「**ヌース**」は、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことである。

理性は、十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別の立場や

コメント [y5]: これは私の見解。西洋哲学では、「**理性**」は普遍的なので、対話は不要という傾向が強い。

見方からの情報を得ることによって育つ。近代哲学における理性(Reason)とは、理由をつけて推論する力や、計算能力を意味する。また、アリストテレス以来の「知性(Intellect)」とは、何を推論するべきかを判断する能力を含んでいる。近代哲学において「知性と理性の逆転」が生じている。

次に、ギリシア語、ラテン語、英語の、理性に関わる訳語の混乱を避けるべく、そもそもの意味を考えていく。

まずギリシア語について述べる。日本語では「理性」あるいは「知性」と訳される「ヌース(Nous)」とは、「mind」「a thought, purpose, resolve」「the sense or meaning of a word or expression」といった意味である。また、ヌースの動詞「ノエオー(Noeō)」は、「to see so as to remark or discern, distinguished from merely seeing」「to think. to be minded」後に「to purpose, intend」へと、さらに「to think out, devise, contrive」や「to think or deem that a thing is so and so」といった意味を示す。古代ギリシアにおいて、ヌースとは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であった。ヌースについて、アナクサゴラスは、万物の根源をなす無数の元素が混沌としている中でヌースが運動を与えて秩序ある世界が形成される、という「万物の秩序の原因」であると説いた。アリストテレスは能動知性と受動知性、アラビア哲学は神の知性と人間の知性、トマス・アクィナスは概念を抽象する能動知性である、と述べた。

次に、日本語で「理性」または「論理」と訳される「ロゴス(Λόγος)」とは、「the word by which the inward thought is expressed」「the inward thought or reason itself」といった意味、すなわち、「言葉に関わるものの全部」を示す。また、ロゴスの動詞「レゴー(λέγω)」は、「to lay, to lay asleep, lull to sleep」「to lay in order, arrange」後に「to gather, pick up」へと、さらに「to reckon, count, tell or reckon up」や「to recount, tell, relate」後に「to speak, say, utter」といった意味、すなわち「数え上げる」ことを示す。古代ギリシアにおいて、そのロゴスは、説得や論証の手段であった。ソフィストは「ロゴスの技術=レトリケー」すなわち説得術であると述べた。そこで哲学者は真理を探究するのか、真理とは説得ではない、といった声上がり、プラトンは対話を通じて真理を探究する、ディアレクティケーと呼ぶ弁証法を述べた。これは真の意味での問いと答えの弁証法だ。そして、アリストテレスの、真の前提から出発する演繹体系として分析論から区別して、一般的に承認された見解に基づく推論である「ロギコス」を説いた。「ロギコス」とはオルガノンという道具・機械的に作動する演算装置であり、後に論理学(Logic)となった。

次にラテン語について述べる。日本語で「知性」と訳される「インテレクトゥス(Intellectus)」はもとは、動詞のintelとlegoで「問+選ぶ・読む」であった。その意味は「understand」や「perceive, discern, recognize」を示す。また、日本語で「理性」と訳される「ラチオ(Ratio)」は、「calculation」「explanation」「manner, method」といった意味を示す。ラチオの動詞「reor」は、「reckon, calculate」あるいは「think, deem, judge」といった意味を示す。

最後に、英語だ。日本語で「理性」と訳されるものは、「Reason」である。また、「知性」や「悟性」と訳されるものは「Understanding」である。Under と stand で「下+立つ」で、知りたいものの下に立つ、すなわち間近で見るということだ。

理性は対話の中で育つ。十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別の立場や見方からの情報を得ることによって、理性(思考力)は育つ。近代哲学における理性(Reason)とは理由をつけて計算する力、または計算能力だった。デカルトの合理主義は実は計算万能主義なのだ。また、アリストテレス以来の「知性 Intellect」は何を推論すべきかを判断する能力を含んでいた。近代哲学において、「知性と理性の逆転」が起こったのだ。

ギリシャ語でヌースとはそもそも purpose ,resolve という意味だった。抽象名詞は動詞から派生してくるものが多いのでヌースの動詞形も見ることがある。ヌースの動詞形はノエオーであり、この意味は discern, to purpose, intend, to think or deem である。ヌースは単に考えるではなく、こうしようと思う新しいことを工夫して作り出すという意味がある。何かしようとする目的を考えるのだ。またよく見て、区別するまたは識別するという意味も含む。日本語では理性や知性の訳語が当てられている。ヌースから派生した言葉にラテン語のインタレクトゥスがある。これは lego (間+選ぶ・読む)や discern の意味を持つ。間を読むとは行間を読むということだ。あてられた日本語の訳語は知性だ。そこから派生したのが英語の Under-stand だ。日本語訳では知性、カント後には悟性となった。Under-stand は「下+立つ」であるが、ギリシャ語では「上+立つ」であり、発想が逆である。このラテン語や英語に訳された過程で欠落したのが purpose や resolve などの能動的なもの、自分が何をやるのか考える、という意味だ。そのような能動性の意味がなくなり、ただ考えるという意味だけが受け継がれた。

ギリシャ語でロゴスとは頭の中で考えた口から出した言葉にかかわるもの全部、考えを表現した言葉全部という意味だった。ロゴスの動詞形であるレゴーンは to reckon, count の意味である。これは床に置く、きれいに並べる、拾う、教えるという順で意味が変わっていった。ロゴスの日本語訳は理性や論理である。そこから派生したのがラテン語のラチオで、これは reckon, calculate というロゴス系の意味も持っているが、think, deem judge というヌース系の言葉の意味も持っており、意味が交錯しているのが分かる。ラチオの日本語訳は理性で、その後に派生した Reason も理性という日本語が当てられる。つまり、ヌースという言葉の意味はロゴスから派生したラチオや、Reason に吸収されていった。それを理解せずに日本人がカントを先に訳し、ドイツ哲学を輸入したことから、さらに意味が混ざり合っている。そして、ギリシャ語のアイステーシスは日本語で感覚(知覚)という訳語だが、ラテン語にはセンスス(感覚)、英語では Sensation(感覚)というように派生した。ラテン語

と英語は少し似ている。すでに目を開くとそこに何らかの意味付け(判断)があり、我々は裸の感覚でものを見ることができない。何かを知るとき、感覚から情報を得ている。

古代ギリシャにおけるロゴスは説得や論証の手段であった。つまり、話し方の技術のことだ。説得イコール真理でなくても、相手を説得できさえすればよかった。嘘を信じさせることもある。相手の信じていることを出発点に言い負かせていく。プラトンもディアレクティケー(弁論術)のなかで、対話を通じて真理を探ることが大切だとした。しかし、対話を通じて真理を探究するのは、信じている出発点が嘘か本当かどうかやったらわかるか分からないのでアリストテレスは批判した。しかし、古代ギリシアにおけるヌースとは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。プラトンはヌースという言葉あまり使っていないが、アリストテレスは能動知性と受動知性に分けて使っている。しかし、能動知性の意味はラテン語に継承されなかった。ヌースはアラビア哲学やトマス・アクィナスのスコラ哲学にもみられる。以上が今回の授業の要点だ。

元の言語から新たな言語へとある言葉が伝わっていくとき、やはりそっくりそのまま意味が継承されることは少ない。違う意味が付け加えられたり、ほかの言葉と合体したりする。だから、日本の哲学を学ぶ人はそのもともとの言語で学ぶのが望ましい。確かに、その言語を学ぶのは大変だが、日本語で学ぶのはやはり古代ギリシャの訳語とは違う部分があるので、もともとの言語で学ぶべきだ。

ぜひそうしてください。

古代ギリシャにおけるロゴスは説得や論証の手段であり、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。アリストテレスのロゴスは論証で、ヌースは何らかの前提を把握する能力である。理性の育て方は、十分な情報を得て、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることである。近代哲学における理性は、理由をつけて推論する力であり、計算能力である。

今回の授業は、理性についてだった。ギリシャ語で、ヌースを理性と訳したり、ラテン語で、ラチオも理性と訳した。これは、訳した時代や人にとる差異によるものだ。

古代ギリシャにおいて、ロゴスとヌースというものがあつた。ロゴスとは、説得や論証の手段という意味だ。ソフィストは、ロゴスの技術=レトリケーとし、これを説得術として教えた。アリストテレスのロギコスとは、後世、「オルガノン」と呼ばれた。オルガノンとは、機械的に作動する演算装置、つまり、Logic(論理学)であるということを学んだ。また、ヌースとは、単に理解するだけでなく、理解に基づいて何かを作り出す力という意味

だ。

ラテン語や英語において、そうしたニュアンスがどのように伝えられ、あるいは伝えられなかったのでしょうか？

ヌースは、スポーツに通じる点がある。意味を理解して練習しないと何も作り出すことはできない。練習でいかに試合を想定して、これはこの場面での連携だなという風に考え理解することができるかで大きな違いだ。

つまり、理解することを怠ってしまうと何も作り出すことはできない。

「似た点」を考えたら、どんなものの間にも考えることができます。スポーツとヌースを類比させることの意味、ないし目的は何ですか？

近代哲学における理由をつけて推論する力、計算能力すなわち理性(Reason)とは対話の中で育つものだ。もう少し詳しく言えば、十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別の立場や見方からの情報を得ることによって理性は育つ。アリストテレス以来の「知性」には何を推論すべきか判断する能力も含まれる。

哲学の訳語は混同されがちである。ギリシア語のヌース、ラテン語のインテクトゥス、英語の Understanding は日本語でそれぞれ理性(知性)、知性、知性(悟性)と訳される。ギリシア語のロゴス、ラテン語のラチオ、英語の Reason は日本語でそれぞれ理性(論理)、理性、理性と訳される。ギリシア語のアイステーシス、ラテン語のセンスス、英語の Sensation は日本語でそれぞれ感覚(知覚)、感覚、感覚と訳される。

言語が違うため訳語に差が出てくるのが興味深かった。なぜなら「日本語の表現の基礎」という授業で聞いた方言でしか表せないものや現象があるという話と重なるところがあるからだ。

ヌースのもともとの意味は心、考え、願い、決意、言葉や表現の意味である。動詞はノエオー。ロゴスのもともとの意味は内側の考えを言葉によって表現する、または内面に抱える考え思想そのもの。動詞はレゴー。

古代ギリシアにおいてロゴスは説得や論証の手段であり、ヌースは理解し理解に基づいて何かを作り出す力を表した。しかしロゴスでは説得できてもそれが心理真理とは限らない。

今回の講義で理性は対話で育つことを学んだ。やはり、情報を得るには対話が必要であり、対話は情報を得るだけでなく、別の立場の意見を聞いたり、質問できたりするので理解する力をつけるためには、対話は重要なポイントとなる。理性を表すギリシャ語、ラテ

コメント [y6]: 一語で表せないにしても、言葉を重ねて説明すれば理解できるのではないですか？

ン語、英語の表を見た。よく見ると、理性は論理と知性、悟性らと伴って訳されている。そのうえ、もともとの意味は、**purpose, resolve, the word by which the inward thought is expressed** と訳されている。つまり、意図、決心、分析などというように思考することを表す単語に訳されている。他にも、**calculate** という計算するというように訳されているラテン語も理性を表すとされている。考えることは、物事を組み合わせたり、削ったりすることも含んでいる。だから、**calculate** も理性を表しているのだろう。またヌースという言葉には理解に基づいて何かを作り出す力という意味も含んでいる。つまり、創造することは理性が備わっていないとできないことを意味する。確かに、モノを作る人間、社会制度を作る人間など何かを社会に対して作ったり、残していたりする人間は理性が備わっていないとなれない。例えば、理由をつけて推論したり、判断したりすることができなければ社会に対してまともなモノを残さない。だから、理解する力はこれからの社会を生きる上で必須事項である。もし、理解する力がなければ、社会の底辺として生きていくしかない。そうなりたくないのであれば、人と対話をし、理性を育てなければならない。

適当なところで段落に区切ってください。

古代ギリシアとアリストテレスのロゴスとヌースには違いがある。古代ギリシアにおけるロゴスというのは説得や論証の手段で、日本語では理性と訳される。当時のソフィストたちは説得だけを目的としておらず、対話を通じて真理を追究しようとした。ヌースというのは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力で、理性もしくは知性と訳される。アリストテレスのロゴスというのは論証という意味で、何らかの前提を出発点として論理で前に進むということとされた。ヌースは何らかの前提を把握する能力という意味で用いられた。古代ギリシアのソフィストは対話を用いて真理を追究していたように対話を重視したが、アリストテレスはその逆で対話は不要だとした。

今回の授業は、近代における理性は理由をつけて持論する力、計算能力という意味で、ギリシャ語のヌース、ラテン語のラチオ、英語の **reason** をそれぞれ日本語訳したものが理性であるということ。また、ヌースやロゴスなど、辞書を見ても意味がよくわからない言葉は、その動詞にまで目を向けると**意味**が見えてくるということが内容でした。

今回の授業から考えると、**理性とは論理的に考える能力であるから、理性を発達させるためには数学を学ぶべきだ。なぜなら、数学は理由をつけて答えなければならないからだ。**例えば、中学校や高校などで学ぶ証明問題がいい練習になります。

したがって、**理性を発達させるためには数学を学ぶべきである。**

コメント [y7]: 具体的にどんな意味でしたか？

コメント [y8]: 具体的にどの部分から考えたのですか？

コメント [y9]: 数学は良いの一つ手段かもしれませんが、他にもっと良い手段があるかもしれません。なぜ数学だけを学ぶべきだという結論になるのか説明してください。

十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理性は育つ。

日本語訳で理性となるヌースのそもそもの意味は **purpose** や **resolve** である。

古代ギリシアにおいてロゴスは説得や論証の手段、ヌースは理解し理解に基づいて何かを作り出す力という意味であった。

ここでヌースは 日本語訳では理性となるのに、 日本語で理性と訳されたとなる ことに疑問を持った。 それは、自分が **考える** に時代背景が **関係** している。なぜなら、その時代によって人の考えは違うからだ。また、例えば鎖国時代はあまり外国からの考えを取り入れなかったが、文明開化の時代は積極的に外国の文化を取り入れていたというように、時代によって **文化** も違うからだ。

コメント [y10]: 事実として、関係ありません。また、ここに書いてあることは、これまでの授業で否定してきたことばかりです。

近代哲学における理性とは理由をつけて推論する力。計算能力。十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、対立する別の立場や見方から情報を得ることによってその理性は身につけることができる。哲学に関連する訳語は現在においてはそもそもの本来の意味と混在してしまっている。ギリシア語で理性(知性)はヌースと言い、理性(論理)はロゴスとなる。古代ギリシアにおけるヌースとは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であり、ロゴスは説得や論証の手段である。

哲学に関する言葉は日本語訳される時に意味が混乱してしまう場合があるので本来の言葉の意味をしっかりと知り、学んだことを次の勉強につなげて **いきたいです**。

コメント [y11]: 決意表明。

ヌース、ロゴス、ラチオ、**Reason** は全て「理性」と日本語訳されている。これらのそもそもの意味は、ヌースは「何かをしようと思うこと」、ロゴスは「考えを表現した言葉全て」、ラチオは「数える、計算する」である。知性と日本語訳されるインクレトゥスは、**そも** **とも** 「行間を読む」という意味であり、ロゴスの動詞形レゴーとラチオは同じ意味を含んでいる。しかし、古代ギリシアではロゴスは「説得や論証の手段」で計算の道具、ヌースは「理解に基づいて何かを作り出す力」とされていた。

「理性」と訳して使っている言葉だけでも、本来の意味には一言で表せないほどの内容が含まれていて、短く省略して訳した日本語では本来の意味の一部しか理解することができていない。研究の際に単語 1 つを調べるときには日本語だけでない他言語で意味を調べ

ることが必要だ。

実行してください。

今回の講義は、古代ギリシアにおけるヌースとロゴスやラテン語のインテレクトゥス、ラチオのそもそもの意味についてであった。ヌースとインテレクトゥスとは、ものを区別する、つまり理性を表す言葉である。ロゴスとラチオとは、考えたことを表現する、論理を意味する言葉である。日本語では、この4つを翻訳する際に、意味が混ざってしまっており、本来の意味と少しずれている部分がある。古代ギリシアでは、理解し、その理解に基づいて何かを創造する力がヌースであると考えられている。アナクサゴラスは、ヌース(理性)が世界を支配していると考えており、万物の秩序を考える際にヌースは最も重要な語であるといえる。

今回の講義で「理性は対話の中で育つ」という考えに共感した。自分ひとりで考えても、得られる情報は限られてくる。また、主観的な判断をしてしまい、物事の本質を見抜けない可能性もある。そうならないためには、自分と違った考え、情報を持った人と対話し、物事を多面的にみる必要がある。そうすることで、理性は育つのだ。

今回の授業では、理性について、また理性・知性・感覚などの語源について学習した。

近代哲学における「理性」(Reason)は理由を付けて推論する力のことである。理性は対話の中で十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をして別な立場からも情報を得ることによって育つ。ものを見る→判断する→行動する・考えることの繰り返しである。

理性の語源について、ギリシア語のヌース(=理性)は英語では **purpose, resolve** の意味である。動詞ではノエオーと表し、よく見て、他と区別するといった意味になる。ギリシア語のロゴスは数えるといった意味である。ラテン語のインテレクトゥスは英語では **understand, discern** といった意味である。

古代ギリシアではソフィストはロゴス(説得の手段)=説得術を説くのが仕事だった。アリストテレスの著作をみつめた「ロギコス」=オルガノンが現代の「Logic」論理学の語源になった。

理性(理由をつけて推論する力・計算能力)を育むためには、まず十分な情報を得て、その

情報を取捨選択し、違う立場や見方からの情報を加え入れなければならない。つまり、多様な人々と対話をすることによって理性を育むことができる。

哲学用語において、日本語とギリシア語、ラテン語、英語の訳は大変混乱している。例えば、日本語の「理性」はギリシア語で「ヌース」と「ロゴス」、ラテン語では「ラチオ」、英語では「Reason」であるが、ギリシア語の「ヌース」は「知性」という意味も備えている。ここで、元の意味をみてみたい。「理性」「知性」という意味の「ヌース」、意味は、目的を考えることであり、mindと同じ意味で用いられていた。「ヌース」の動詞形、「ノエオー」は、区別するためにしっかりと見るという意味である。「理性」「論理」という意味の「ロゴス」は、考えを表現した言葉という意で、要するに喋る、という意味である。動詞形の「レゴー」は、モノを寝かせる➡規律に沿って並べる➡拾う➡口に出して数えるというような意味があり、総括して、話すという意味になる。次はラテン語、「知性」の「インテレクトゥース」は、間を読むという意味で、つまりは知覚である。この言葉には「理性」という意味はないが、それはギリシア語からの翻訳の際に抜け落ちたといわれている。「理性」の「ラチオ」は、計算という意味である。

古代ギリシアにおいて、ロゴスは説得や論証の手段として用いられ、ヌースは、理解済みの内容について何かを作り出す力のことを言う。

授業を追うにつれ、哲学用語の深い意味がわかってきた。それらは、非常に複雑で複数の意味があるが、結局は一つの意味となり世界に伝播した。私たちが普段使っている理性、知性という言葉には壮大なバックグラウンドがあること、それは古代ギリシアから始まったということを心に留めておきたい。

今回の授業は、前回の復習として、感情は反射反応だから、人の行動を感情で裁いてはいけないこと、論文を書く時などはたくさんの資料を読まなければいけないが、全部しっかり読むことは難しいので、裏技として abstract を斜め読みするだけでもいいこと、孫引きせずにきちんともとの資料を読まなければいけないことを学んだ。

そして近代哲学における理性(reason)は理由をつけて推論する力、計算能力であり、アリストテレス以来の知性(intellect)は何を推論するべきか判断する能力を含むことを学んだ。更に古代ギリシアにおけるロゴスは計算の道具、説得や論証の手段であること、ソフィストの説得術はレトリックと言い、それは説得することに重きを置いていて、真実=説得になっていなかったことなどを学んだ。

子供を育てるための資金負担を中小企業と女性に任せる政策は明らかに失敗であるということを先生は言っていた。確かに先生の書いていた論文の資料を見ても、日本の税金はとて安かった。日本は税金が比較的安いということだけは以前から知っていて、税金が高いが社会保障制度が充実しているスウェーデンなどの国より社会保障制度があまり充実

コメント [y12]: さらに詳しく知るために、井出栄策『日本財政 転換の指針』岩波新書、宮本太郎『福祉政治』有斐閣、佐藤滋他『租税抵抗の財政学』岩波書店、などを読んでみましょう。

していないことは何となくでしか認識していなかった。実際それがどこの負担になっているかを知り、さらに自分が将来なるかもしれない母親に負担がかかるとなると、日本の税金や社会保障の仕組みを見直して、もっと国が社会保障の資金を政府が負担するようにしなければならぬ。そのためにはもっと国民がこういった事実を知って危機感を抱き、政治に関心を持ち続けて、自分たちで自分たちが生きやすい国を作っていかなければならぬ。

近代哲学における「理性」とは、理由をつけて推論する力、計算能力であると意味づけられていた。さらに「知性」とは、「理性」を形作ることに於いて「何を推論すべきか」を判断する能力として意味づけられていた。更に「感覚」の概念についても、モノを「知る」ことは「感覚」を通じて行われる、と解釈されていた。人間がモノを「知り」、「考える」ためには、人間の「感覚」がモノの輪郭を抽出し、モノに意味付けを行うプロセスを経る、と考えられていた。理性や知性、感覚についての概念は古代ギリシアの時代から考えられ、近代に進むにつれて、それらの言葉はギリシア語からラテン語、英語へと訳されていった。

そもそも「理性」がギリシア語で訳されると、「ヌース」と表される。古代ギリシア語の意味が英語で記された辞書を開いたとき、「ヌース」の意味は「a thought, purpose, resolve」と表される。更に「ヌース」の動詞形「ノエオー」も辞書で調べた時、「to see so as to remark or discern, distinguished from merely seeing」と表される。つまり「理性」の語源は、モノを「よく見る」ことで、それが「何であるかを区別」し、何らかの「目的」のために考える力であった。このように、抽象的な意味が書かれた「ヌース」をより分かりやすく捉えるためには、動詞形、つまり具体的な意味が書かれた「ノエオー」を調べることで、古代ギリシア時代に考えられていた概念を深く知ることにつながる。もう一つ例を挙げるのなら、「論理」はギリシア語で「ロゴス」と訳されていた。意味は「the word by which the inward thought is expressed」であるが、つまり頭で考えたことをそのまま口に出す、「お話し」という意味である。「ロゴス」の動詞形は「レゴー」であり、その意味は「to lay in order, to gather, pick up, to reckon, count, to speak」である。順序立てて並べ、集め、数え、拾い、話すということである。やはりこのように名詞を動詞に変えて意味を見出すことで、具体的な言葉の概念が分かってくる。言葉の意味を見出せなければ、その言葉が現れた経緯も知ることができない。近代哲学を考えることに於いて、哲学者の考え方やその知る前に大切な力が、言葉の語源を知ることにあるのだ。

総合的に考えると、古代ギリシアにおける「ヌース」とは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力として、「ロゴス」とは説得や論証の手段として考えられていた。合理的に問題を解決するために「理性を育てる」由縁は、古代ギリシアから考えられていたという

ことである。人間は議論を開く上に十分な情報を得ることで「理解」し、説得術を練る。古代も今も、人間は理性と知性を働かせて「対話」する力を養うという点に関しては変わらない。

十分な情報を得てそれから妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理由をつけて推論する力である理性は育つ。ギリシア語でヌースは日本語に訳すと理性、知性であり、ラテン語に訳すとインテレクトゥス、英語に訳すと **understanding** である。ギリシア語でのロゴスは日本語に訳すと理性、論理であり、ラテン語に訳すとラチオであり、英語に訳すと **reason** だ。ギリシア語でアイステーシスは日本語に訳すと感覚であり、ラテン語に訳すとセンススであり、英語に訳すと **sensation** だ。ヌースは何かしようとする目的を考え、ロゴスは理由だ。ラテン語のラチオの大まかな意味は計算するだ。ヌースとロゴスは意味が交差している。そして、古代ギリシアにおけるロゴスは説得や論証の手段であり、計算の道具だ。そこでプラトンのディアレクティケーは理屈を挙げて審理を挙げることだ。アリストテレスは出発点はどうやったらわかると考えた。レトリックとは出発点は嘘でも構わないという考え。ヌースとは理解に基づいて何かを作り出す力。

これらから、もともとのギリシア語の概念に対して、日本語、ラテン語、英語の訳語は混乱している。

コメント [y13]: その「誤訳」や「誤読」を糧にして哲学は進展してきた、ともいえる。

ギリシア語の「ヌース」は日本語で「理性・知性」と訳されるが、元は「**purpose**」や「**resolve**」といった意味である。また、「ロゴス」は日本語で「理性・論理」と訳されるが、元は「**reckon・count**(数える)」という意味である。

ラテン語の「インテレクトゥス」は日本語で「知性」と訳されるが、元は「**understand**(理解する)」や「**discern**(識別する)」といった意味である。また、「ラチオ」は日本語で「理性」と訳されるが、元は「**reckon・calculate**(数える)」や「**think**(思う)」といった意味である。

古代ギリシアにおいては、「ロゴス」は説得や論証の手段のことであり、その技術のことをレトリック(説得術)といった。また、「ヌース」は理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことであり、最初に「ヌース」に影響を与えたのはアナクサゴラスである。

今回、質問・意見はありません。

ちょっと短い。

授業のまとめ

授業の冒頭では、人の行動を自分の感情で裁いてはいけないということ、効率よく情報を得るための方法を学んだ。効率よく情報を集める方法として、英語の論文の一番最初に書いてある問題提起の部分と結論の部分をしっかり読む、というものがある。また、理性は対話の中で育つ、ということも学んだ。この言葉は、対話をしていく中で十分な情報を得て、別の立場の考え方や見方からの情報を得ることによって理性は育つ、という意味である。

今回の講義ではヌースとロゴスの違いを中心に学んだ。

そもそもヌースとは目的を考える、ということである。英語に訳すと **purpose**、**resolve** などとなる。この説明だけでは抽象的すぎるのでヌースの動詞を調べると、区別するためにしっかり見る、という意味を含んだ **discern** がある。また、そこから派生して、**to purpose** や **intend** などのように、何か新しいことを思いつくという意味もある。さらに派生して、新しいものを工夫して作り出すという意味も含んでいる。

ロゴスは考えを表現したもの全て、頭の中で考えたこと全てという意味がある。その具体例として、歴史やストーリーが挙げられる。より詳しく内容を理解するためにロゴスの動詞形であるレゴの意味を調べてみると、「床に置く」「並べる」という意味を中心に、「秩序をもって並べる」、そしてそれを「声に出す」という風に意味が広がっている。

ヌースとロゴスをラテン語でいうとどうなるのだろうか。ヌースは「インテレクトゥス」となり、英単語で表すと「**discern**」である。日本語に訳すと、行間を読む、となる。また、「**understand**」とも言い換えることができ、間近に立ってよく見る、とも訳すことができる。ロゴスはラテン語で「ラチオ」と言い、「**think**」や「**deem**」と訳すことができる。日本語でいうと計算する、数える、という意味になる。

では古代ギリシアにおけるロゴスとヌースはどのようなものだったのか。ロゴスは説得や論証の手段とされていた。その例としてソフィストは、ロゴスの技術をレトリケーと言い、相手を打ち負かす技術という意味を含めて使った。そしてロゴスは、機械的な計算道具のようなもの、とも考えられていた。その例としてアリストテレスの「ロギコス」などの論文調でまとめられた、オルガノンが挙げられる。オルガノンでは、ロゴスは道具・機械的に作動する演習装置とされている。

古代ギリシアにおけるヌースについては次回の授業で学ぶ。

意見

十分な情報を得ることで理性は育つ、という意見に賛成だ。なぜなら、自分の頭の中だけで考えると、最終的に偏った意見になってしまうが、自分以外の複数の人から情報を得ることで少し自分から離れて、客観的に物事を見られるようになるからだ。それは、現在の国会運営にも同様のことがいえる。与党が中心になって政治を主導するが、それに対し外から野党は監視し、政治運営に関しておかしい部分に対しては、客観的な目線から意見

コメント [y14]: 現在の国会の状況は、ひどいものです。なんとか理性的に対話して合理的な結論を出すための機関にしていなくてはなりません。

を述べる。この構造があることによって偏った考えにならないように政治は運営されている。そうすることで政治が理性的に運営されることが可能になる。

以上のことから十分な情報を得ることによって理性は育つ、という意見に賛成だ。

授業まとめ

今日の授業では、理性について学んだ。

まず、理性は十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理性(思考力)は育つ。近代哲学における理性(reason)とは、理由をつけて推論する力で計算能力であった。また、アリストテレス以来の理性は何を推論するべきかを判断する能力である「知性 intellect」を含んでいた。これより、近代哲学における「知性と理性の逆転」が起こったことがわかる。

日本語の理性という語は様々な語の訳として使われている。ギリシア語のヌースという語のものの意味は、purpose resolve などであった。その動詞のノエオーとは、discern purpose intend think deem という意味であった。また、ギリシア語のロゴスという語のレゴーの意味は speak say utter という意味だった。次にラテン語のインテレクトゥスの動詞は intel-lego(=間+選ぶ・読む)で understand perceive discern recognize という意味であった。また、英語の under-stand=下+立つであり、ギリシア語は上+立つであった。ラチオとは calculation explanation の意味であった。

日本語で理性とひとくりに訳されるが、訳される前の言語は様々な意味を持つ。

古代ギリシアにおけるロゴスとヌースには違いがあった。ロゴスとは説得や論証の手段であった。古代ギリシアにおいてはソフィストがロゴスの技術であるレトリケーを説得術として用いていたが、次第に言い負かせばよいのか、という疑問が浮上し、真理と説得について問われるようになった。これは、プラトンのディアレクティケー(弁証術)やアリストテレスの機械的な道具という意味のロゴギス(オルガノン)からわかる。一方、ヌースは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。この語をはじめに用いたのはアナクサゴラスで「万物の秩序と原因」とした。次に、アリストテレスは「能動知性と受動知性」とし、アヴィケンナやアヴェロスのアラビア哲学では「神の知性と人間の知性」とされた。また、トマス・アクィナスは「概念を抽象する能動知性」とした。

意見・質問

理性は様々な語の訳として使われているが、理性と訳される前のものの意味を理解することで理性について深くより知り、それを踏まえた上で対話すればより理性を在身に着けることができる。

今回の講義では主に哲学用語の訳について学んだ。日本語での「知性」、「理性」はギリシア語、ラテン語、英語でそれぞれ「ヌース」、「Intellectus」、「Understanding」で、「理性」、「論理」は「ロゴス」、「Ratio」、「Reason」そして「感覚(知覚)」は「アイステーシス」、「Sensus」、「Sensation」である。また、これらのラテン語のそもそもの意味は、まず「ヌース」は「mind」や「purpose」「resolve」など考えることであったり、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことである。次に「ロゴス」は頭の中で考えた言葉を表現した言葉である。また、説得や論証の手段のことであり、計算道具的な存在である。

今回の講義で疑問に思ったことがある。ロゴスのそもそもの意味を訳すと内側の思考が表現された言葉となるのだが、古代ギリシアでは、**説得や論証の手段**となっており意味が違っている。これは時代により段々の変わってきたものなのか疑問に**思った**。私は頭の中の言葉を表現することを重ねていくことで、**理屈や説得のある言葉**になっていったため、言葉の意味自体は似通っていると**感じた**。**実際はどうなのだろうか**。

コメント [y15]: 自分の思考を述べることで、相手を説得するということです。

コメント [y16]: 疑問はまずは自分で調べてみましょう。

「理性を保つ」「理性を失う」という言葉があるように辞書によると「理性」の意味は、「物事の道理を考える力」「感情や欲求に流されることなく、物事を判断する能力」とある。その理性とは、対話の中で育つのだ。十分な比較対象や情報を得ることによって、その情報から妥当な価値判断をし、別な立場や見方からの情報を得て、理性、言い換えると思考力が育つ。様々な経験を経るごとに自分の価値判断能力が洗練されていくからだ。しかし、「理性」はギリシア語、ラテン語、英語において、それぞれ順番にヌース、ラチオ、Reasonと訳されている。古代ギリシアにおいて、ヌースとは、理解に基づいて何かを作り出す力という意味である。

辞書を引く前に授業の復習をきちんとしましょう。

ギリシア語で「ヌース」は日本語訳で「理性」。そもそもの意味は mind でその後 purpose, resolve に転じて、それから「工夫してあったらしいものを作り出す」という意味を含むようになった。ロゴスのもとになっているレゴという動詞はもともと「並べる」という意味を持っており、そこから「拾う」という意味を持つようになり、さらに「数え上げる」という意味も持つようになった。ラテン語の「インテレクトゥス」は日本語では知性という意味であり、関連して understand がある。これを分解して考えると under-stand=「下に立つ」ととれる。ギリシア語の「エピステーメー」は「上に立つ」ととれる。この二つから、物事を理解するには、対象の間近でよく見る必要があると推測

できる。古代ギリシアではロゴスは計算の道具であった。また、ヌースは理解し、それに基づき、何かを工夫して生み出す力であった。

今回の授業では「理性」について学んだ。この「理性」という言葉は、ギリシア語のヌースという単語の日本語訳から出てきた。他にも、ラテン語でラチオ、ギリシア語でロゴス、英語では reason などの単語が「理性」という意味を持つ。

今回の要点は、近代哲学における理性とは理由をつけて推論する力、つまり計算能力ということである。実際の理性の意味は、「本能や感情に支配されず、道理に基づいて思考し判断する能力」である。(明鏡国語辞典より 大修館書店)。このことから、理性=計算能力と理解するのは難しい。しかし、古代ギリシアにおいて理性の意味を持つロゴスとは計算をするためのものであった。つまり、理性という言葉は計算能力という意味を持つと解釈できる。このことは理解し考える力を身につける上で理解する必要がある。

以上のことから、今回の要点として理性には推論する力という意味だけでなく、計算能力という意味も持つことがある。

コメント [y17]: ロゴスの訳としての理性と、ヌースの訳としての理性では意味が異なる、というのが今回の授業の要点。

今回の授業では、次の授業からの導入として、用語、訳語の意味を主に学んだ。ロゴスは計算や思考の「道具」であり、ヌースは何かを作り出す力である。(～しようぜ!のようなもの)ロゴスは自分自身の頭の中で表現するものである。日本語訳にすると「理性」という意味になるヌースやラチオや reason でもそれぞれ違った意味を持つ。日本語訳の理性だけで意味を理解した気になってしまうので、英語訳された意味が重要である。

短すぎ。

今回の授業の要点は、理性は対話の中で育つこと、訳語の混乱があり本来の意味とは違う意味で使われているということだ。

ロゴスを例にあげると、ロゴスの日本語訳は、理性や論理と訳されることが多い。しかし、古代ギリシアにおけるロゴスとは説得や論証の手段である。ソフィストの説得術やプラトンの弁証法などがそうである。時代の変化で意味や捉え方が変えられたのか、自然と変わっていったのかは分からないが、変化が起きたということほはそれが必要なことだったのだろう。理性や知性を示す手段から理性や知性そのものを表す言葉へと変わった。この大きな変化はなぜ起きたのか。古代ギリシアではソフィストという職業教師がいたため、説得や論証といったロゴスの技術を教えていた。しかし、自然哲学が登場し、ロゴス

コメント [y18]: どのような変化ですか？

コメント [y19]: どういうことですか？

の技術ではなく自然へと哲学者や知識人の興味や好奇心が向き、説得や論証の技術ではなく自然の摂理や真理を追い求め始めたからだと考えた。

授業では、単に「理性」や「知性」や「悟性」といった哲学用語のもともとの意味を説明しただけで、あなたが書いているような「大きな変化」といったことは述べませんでした。

理性は対話の中で育つ

十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理性(思考力)は育つ。例えば近代哲学における理性(Reason)は理由をつけて推論する力や計算能力。また、アリストテレス以来の「知性 Intellect」では何を推論するべきかを判断する能力。

外国の言葉を日本語で訳しても様々な意味になり混乱している。例えば、ギリシア語のヌースやロゴスである。ヌースには知識、ロゴスには理論という意味があるが、この二つの語には理性という同じ意味をもつ場合がある。つまり、時や状況によって使い分けが必要となるということである。そもそも、ヌースは purpose, resolve という意味をもち、ロゴスは the word by which the inward thought is expressed. という意味を持っている。

また、古代ギリシャにおけるロゴスは説得や論証の手段である。その中で、ソフィストは「ロゴスの技術=レトリケー」と述べ、それはつまり説得術である。それなら、説得できれば何でもよいのか?というわけではない、真理は必ずしも説得ではないのだ。また、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。それは、アナクサゴラスの「万物の秩序の原因」やアリストテレスの「能動知性と受動知性」などによって述べられている。

アリストテレスの中ではロゴスとは論証(アポデイクシス)であり、それは何らかの前提を出発点として倫理で前に進むという意味であると述べ、ヌースとはその何らかの前提を把握する能力であるとした。

今回の授業を通して言語の訳がそれぞれの国によって違うこと、古代ギリシアの「ロゴス」と「ヌース」の違いについて学んだ。「ロゴス」はプリントにも書いてありますが、説得、論証の道具であること。「ヌース」は purpose や resolve などの意味から何かを作り出す力であるということだ。本来の意味は何でしたか?

初心者に新しい知識を伝えるためには表現はできるだけ容易なほうがよい。例を挙げると海外から日本へやってきてくれた観光客に母国語を話せるのがベストだが、日本語しかわからなかったら難しい表現は必然と避ける(はずだ)。ここで日本の「理性」の意味を見ると各言語の意味を持った多義語になっている。哲学が人に広めるために生まれた学問であ

コメント [y20]: そのようなことは言っていないが。

るかは分からないが、後世に残すのであればできるだけたくさんの意味を持った複雑な言葉にしないほうがよい。

授業内容と関係ありません。

コメント [y21]: 哲学は文化財ではありません。同じことを「物理学」について言ったらおかしいでしょう？

物を「物」だと認識し、それを頭の中で理解し、発言、発信する過程そしてそれらを表す言葉の本来の意味や変化してきた時代背景と過程について学びました。

後半で相手を言い負かすのではなく、物事の正しさについて議論、討論することが大事だと言うことがわかってきたとの説明を受けましたが自分の意見に正当性、根拠がなければ相手の意見を打ち負かすことはできません。

コメント [y22]: どんな言葉のどんな意味ですか？

つまり、相手の意見を打ち負かし自分の意見を通すことが自分の意見という物事の「正当性」を証明する足がかりとなるのです。

コメント [y23]: そのような説明はしていません。具体的にどういう話だったのか、説明してください。

もちろん暴力や恐喝によって通された意見に正当性があるとは思えませんが、しっかりと議論された上で相手の意見を打ち負かし自分の意見を通すのは物事が正しいかどうかを議論するより簡潔で、結果も同じものになります。司法、ひいては裁判所という議論の場では 2 人以上の人間がお互い自分自身の意見が正当であると主張するために相手の意見を打ち負かし、そしてそれが認められているというのが根拠になります。

今回の授業で、人は感覚の段階で意味づけを行っていること。近代哲学における理性は計算能力であると考えられており、「知性と理性の逆転」が起きたこと。もともと、ヌースは「目的を考える」、ノエオーは「よく見る、考える」、ロゴスは「考えを表現した言葉全て」、レゴアは「寝転ぶ、話す」、ラチオは「計算」、といった意味であること。古代ギリシャにおけるロゴスは説得や論証の手段であり、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であることを学んだ。

ソフィストはロゴスの技術を用いて説得することを考えたが、ソクラテスやプラトンは言い負かせることはいいのかと考えた。真理が説得であるというわけではないので、たとえ正しいことであっても、相手を言い負かせてはいけない。また、プラトンのディアレクティケーは論理追求をする手段ではなく、出発点が共有されているので、対話を行い、相手を納得させる手段である。意見が分かれたときなどは、お互いの意見を尊重しながら、相手を言い負かせる説得ではなく、納得させる説得を行うことが重要である。

コメント [y24]: そんなことは言っていない。「相手が納得することと、真理であることは別」と言ったのです。

ヌース=理性、知性であり、ヌース=Understanding=知性、悟性である。また、ロゴス=理性、論理であり、ロゴス=Reason=理性である。これらから、ヌースにも理性という意味があり、ロゴスにも理性という意味があつて訳語の混乱が生じている。

ここで、ヌースとロゴスのそもそもの意味の違いをみる。ヌースは **purpose** や **resolve** といった「目的」を表す。動詞の意味は、他のものと区別するためにしっかりみる、や、新しいものを作り出すといった意味がある。一方でロゴスは動詞の意味は、**to reckon** や **count** といった数を数えるという意味がある。

ラテン語のインテクトゥスは **discern** といった「見分ける」という意味がある。ラチオは **reckon** や **calculate, think, deem, judge** といった「数える」、「計算する」といった意味がある。

古代ギリシアにおけるロゴスとヌースの違いをみる。ロゴスは説得や論証の手段、つまり計算道具である。ソフィストのレトリックという考え方があり、レトリックとは、嘘でも構わないから相手を説得させれば良いという考えである。また、プラトンのディアレクティケーという考え方もあり、ディアレクティケーはレトリックと違って、真実を積み重ねて説得させるのが良いとされる考え方である。ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。

アリストテレスは自分ですごく考えるため、著書は**の中で対話は少なめ**の論文スタイルであるが、プラトンは主に対話でできている。

今回は、哲学でよく目にする「理性」などの言葉についての話だった。

私のように高校で倫理を少し勉強しただけの人間には、「理性」や「悟性」のような言葉は読めるが**正確に意味**を捉えることはできない。意味がなんとなく思い浮かぶことはあるが、それは日常会話や物語の中で使われている意味だ。そういう用語は、哲学の話をするときは多少なりとも意味が違う。

今日使われている「理性」や「悟性」などの言葉はもともとギリシア語である。英語や日本語にピッタリと当てはまる表現はないので、正確に翻訳しようとするとも一単語にまとめることは難しい。ゆえに、哲学書等で簡潔な単語で記されているとしても、それには多くの意味が内包されている。

哲学を勉強する際、数多ある書籍のいずれを手にとってもこのような用語は登場する。日本語に翻訳されたそれらの用語が今一つ理解に欠けるようであれば、今回のような方法を用いて、できる範囲で原語の意味を辿ることも一つの方法である。

コメント [y25]: 今回、どのような意味だと学びましたか？

近代哲学における理性(Reason)は理由をつけて推論する力である。十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理性(思考力)は育つ。しかし、近代哲学では「知性と理性の逆転」や訳語の混乱が起きている。例えば、ギリシア語で「ヌース」という言葉は、日本語訳すると「理性・知性」だが、そもそもの意味は「a thought,purpose,resolve」である。動詞「ノエオー」は、「to purpose,intend」を意味する。ラテン語で「ラチオ」という言葉は、日本語訳すると「理性」だが、「reckon,calculate」を意味する。

古代ギリシアにおけるロゴスは、説得や論証の手段であり、ソフィストは「ロゴスの技術=レトリケー」=説得術、プラトンは「ディアレクティケー(弁証術)」と表している。また、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であり、アリストテレスは「能動知性と受動知性」、トマス・アクィナスは「概念を抽象する能動知性」と表している。

今回の授業では知性と理性について学んだ。前回の授業でもあったが近代哲学において理性(Reason)は理由をつけて推論する力、計算能力とされる。ルソーは理性がもとより人に備わっているものだとし「十分な情報を与えられれば」、少しの誤算はあるだろうが一人でも多数でも結論は同じになるはずだとした。だが理性は対話の中で育つもので十分な情報から妥当な価値判断をし、別の立場や見方からの情報を得ることで育つものだ。またアリストテレス以来の知性(Intellect)は何を推論するべきかを判断する能力を含むものだ。人が物事を考えるには感覚でとらえたものを理性で考え、知性でどうするかを考えるという手順を踏んでいる。

それらの言葉は様々な言語で訳される間に混乱が起きている。そこでそもそもの意味について学んだ。ギリシア語のヌースは日本語では理性、知性と訳される。この語には purpose,resolve といった「目的、意図」を表す意味が含まれ、動詞のノエオーにはただ考えるのではなく新しいことを工夫して考え出すという意味合いがある。ギリシア語のロゴスは日本語で理性、論理と訳され考えを表現した言葉やしゃべったことを意味する。

またこれらの語はラテン語にも翻訳されている。ヌースはインテレクトゥスと訳され understand,discern といった「分かる、理解する」という意味を持つ。ロゴスはラチオと訳され reckon,calculate といった「数える、計算する」という意味や「考える」の意味を持つ。この二つは訳される過程で意味の交錯が起こっておりインテレクトゥスにおいては自分で考えるという意味合いが抜けている。

古代ギリシアにおいてロゴスは考えを口に出したものという意味から説得や論証の手段だった。ロゴスに対しては様々な意見があり、ソフィストの間ではロゴスの技術(レトリケー)は説得の技術とされたが説得によって出たものが真理ではないとしたプラトンは対話から真理を探究するディアレクティケー(弁証法)を説いた。アリストテレスは論理を重視し機械

的に作動する演算装置としての利用をした。ヌースは理解し、それに基づいて何かを作り出す力である。中世ヨーロッパでは哲学を神の研究に利用しようとし神の知性を人間の一部に取り込もうとした。

今回の講義では、ヌースとロゴス、アイステーシスの日本語訳やラテン語、英語の意味について述べられていた。また、それぞれの言葉の意味とその意味の広がりについても述べられていた。ヌースという言葉は、思い、考えなどの意味であった。ロゴスは考えを表現した言葉であり、言葉全体に関わるものである。ヌースとロゴスは互いに関わり合い、新たな意味が生まれた。また、一般的にヌースの方が上位のものとされており、ロゴスは下のものとなっている。そのロゴスは、民主主義が成立した後に生まれ、他者を納得させるための方法とされていた。

私は、アリストテレスが考えた「ロギコス」が最も優れていると考える。ソフィストの「レトリケー」やプラトンの「ディアレクティケー」は、嘘であっても相手を納得させたから勝ちという考えだ。これは、相手の考えを捻じ曲げるという卑劣な行為である。組織では、自分の意見を通そうとするときに使われることがあるが、日常生活の中ではできるだけ使用しないほうが良いと考える。その点アリストテレスの「ロギコス」は、論理的に考えるものであるので、社会生活の中では、必要不可欠なスキルになってくる。その上、嘘などつかなくても相手を納得させることができるので、良いと考える。

コメント [y26]: 何の中で、どういう点で優れているのですか？

コメント [y27]: 対話によって真理を追究すること。

コメント [y28]: 無理強いするのではなく、自分から納得するのなら、「捻じ曲げて卑劣」とは言えないでしょう。

今日の授業では主に、ヌースやロゴスのそもそもの意味について学習した。ヌースやロゴスは、ギリシア語やラテン語、英語で意味が同じであるのに日本語に訳すと意味が異なっている。ギリシア語とラテン語、英語からそれぞれ日本語に訳す時に訳語の混乱が起きていた。ヌースのそもそもの意味は、「何かしようという目的」という能動的なものである。動詞のノエオーは「よく見てそれが何であるか識別する」という意味で、そこから「目的を考える」や「新しいことを思いつく」という意味が派生していった。ロゴスのそもそもの意味は、物語などの「頭の中で考えたものを表現したこと」であった。動詞であるレゴーは、「横たえる」や「床に置く」という意味から「秩序立てて考えをまとめる」や「数える」という意味が派生していった。

古代ギリシアにおけるロゴスは「説得や論証の手段」であった。ソフィストはロゴスの技術を用いて、相手を説得して打ち負かすことをレトリケーとした。しかし、説得されたものが真理であるとは言えない。プラトンは対話を通じて理屈を並べ、真理を深めていくことをディアレクティケーとした。これにアリストテレスはディアレクティケーは相手と

共有した所から始めているとして、その出発点が正しいかどうかを考えた。アリストテレスは、ロゴスをオルガノンとして機械的に動く計算機のようなものとした。また古代ギリシアにおけるヌースは「理解し、理解に基づいて何かを作り出す力」であった。アナクサゴラスが最初に大きな意味を与えた。7~8世紀ごろにイスラム圏で哲学が発達し、アラビア哲学として神の研究がされていた。そして、12~13世紀にアラビア語に訳されたアリストテレスの本がヨーロッパに持ち帰られ、再びラテン語の訳された。

プラトンの考えたディアレクティケーは相手との対話において単に相手を説得して言いくるめることは、真理ではないということである。お互いに説得ではなく理屈を並べ、真理を深めていくことが大切なのであり、これは自分より対話に優れた理性的な対話によって合理的な結論を出してもらおう代議制民主主義の考えと似ている。

今回の授業はロゴスとヌースを題材とした授業であった。古代ギリシア語において、ロゴスとヌースの二つは日本語で「理性」と同じ言葉で訳されていた。この言葉の意味・そして現代にいたるまでにどのような変化の過程があったかというのが授業の要点である。今回は、古代ギリシア語におけるロゴス・ヌースの言葉の意味からコメントを記入する。

ロゴスというのは、説得や論証の手段。ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であると今日学んだ。日本語では同じ理性として訳されているにも関わらず、その2つの中身は大きく違っている。ロゴスが相手にどう納得、あるいは理解させるかという説得・論証の手段であるのに対し、ヌースは理解の上で何かを作り出す「力」そのものを指している。対して、理性というのは「ほかの何か(感情や欲望など)が関与することなく、物事を判断する能力」である。日本語訳では理性として訳されているこの二つの言葉がもつ意味と、理性という言葉が本来持つ意味は決して同じとは言えない。

相手を説得させるためには、自分自身の考えをしっかりと固めたうえで、相手に伝わるように、筋道をたてて論理的に進める必要がある。それがプレゼンテーションであれ、対談であれ、そのおおもとの部分は変わらない。そこから先、相手に伝える「手段として」どうするのか、という部分がロゴスであり、そこには「説得術」や「弁証術」・「論理術」がある。あくまでも方法であり、ロゴスが示す範囲は少々狭い部分に限られている。

比べて、ヌースという言葉が示す範囲は広い。何かを作り出す力というものは「関連あることにたいして理解し、その理解に基づく」必要がある。理解するということから実際に何かを作り出すまで、幅広い部分はその言葉には含まれている。ロゴスが何か前提をすでに把握したもとの、そこからどうするかという意味であるのに対し、ヌースはそもそも前提を把握するという部分にこれらの大きな違いがある。

これら2つの言葉は、日本語になったとたんに「理性」という二つの文字でひとくりにされてしまう。しかし、その二つの言葉の本来の意味は、とても理性という短い言葉で

説明できるようなものではない。様々な資料を読んでいくうえでも、それを正しく理解するためには、ただ日本語に訳して考えるのではなく、その言葉が本来どのような意味を持っているのかを考えることは非常に重要になってくる。

日本語で「理性」といわれると意味が分かりにくいですが、ギリシア語でそもそもの理性の意味を考えると分かりやすい。「ヌース」は何かしよう、という目的や考えを表す言葉であり、「ノエオー」はよく見て他のものと識別するといった意味を持つ。「ロゴス」は話したものの、言葉に関わるもの、頭の中で表現したもの全てを表す。

英語の **understand** は「下+立つ」で構成されており、何か知りたいものに対して間近に立ってよく見るという意味である。対して、ギリシア語では「上+立つ」と構成されており、英語とは真逆になる。

古代ギリシアにおける「ロゴス」は説得や論証の手段であり、暴力で解決をするのではなく言葉で言い負かすなどといった人を説得させる力が大切であると、古代ギリシアやアテネで大切にされた。ソクラテスは出発点は嘘であっても、相手に認めさせればそれによいというレトリックを主張した。対してプラトンは出発点が真実でなければならないディアレクティサーを主張した。さらにロゴスは計算機のような機械という意味もあった。「ヌース」は理解し、理性に基づいて何かを作り出す力を意味する。

年功序列型賃金制について、年齢が増すごとに賃金が増えることに何の疑問も持っていなかったが、従来の日本では、結婚する、子供ができる、など年齢が増すにつれて、お金が必要になるので、家族を養えるくらいの給料にするという仕組みからできていたことを知った。この制度があるおかげで、社会保障がなくても、自身で賄えるため、税金が低くても済んだ。しかし、現在は人口が減ってしまって、その制度がうまく回らなくなってしまったので、政策の失敗となった、ということを知った。

ギリシア語の、「ヌース」、「ロゴス」、は日本語訳にすると、「理性、知性」、「理性、論理」となり、「ヌース」のそもそもの意味は、**a thought, purpose, resolve**、であり、理解し、理解に基づいて何かを作り出すという意味で使われていた。また、「ロゴス」は、古代ギリシアの時代において、計算の道具という意味で使われていたことが分かった。

理性や知性と云った哲学用語の意味を理解することが今回の目的だったのですが、十分に理解できましたか？

コメント [y29]: 山口裕之『大学改革という病』pp.197 - 205 に簡略な説明があります。同所で参考文献を指示していますから、さらに詳しく知りたい場合には参考文献を参照してください。

今回、ロゴスとヌースについての講義をとおして、時代が変わったり人によって捉え方は違うのだと感じた。また理性は対話の中で育つとありました。私は本当にそうだろうか
と疑問に思います。なぜなら理性が対話によって育つなら宗教や自分自身で悟りを開いた
りする人たちの理性は育っていないことになるのではないかと考えたからだ。しかし、昔
の社会や世界にはそれらを素晴らしいものだとし、信仰して来た人、信仰している人がい
るのはおかしいのではないのだろうか。よって私は理性は対話なしでも育つのではないかと
考える。

率直に言って、大変残念なコメントです。「総合科学入門講座」最初の三回分など、これまで説明してきた「コメントの書き方」を復習しましょう。

理性は、会話の中で十分な情報を得てそこから価値判断をし、別の立場から情報を得る
ことで育つ。訳語はギリシャ語ラテン語などによって様々になっている。ギリシャ語のヌ
ースは理性と訳されているが、本来は目的などの意味がある。またレゴーはロゴスの動詞
で計算するなどの意味がある。ロゴスは何らかの前提を出発点として、推理で前に進むと
いう意味がある。またヌースは基本的に、外界対応する受動的なはたらきでもある。

ロゴスとヌースの説明で何らかの前提とあったが、何らかの前提とは何だろうか。今回
の授業はギリシャ語やラテン語の説明ばかりで、いまいち具体的に把握しづらかった。哲
学用語の基本的な意味を知ること、今後の授業に繋がったりまた自身でコメントやレポー
トを書く時、文献を読む時に意味を理解することができるというのはわかった。しかし具
体的にどういったものか分からず、前記のような状況で理解出来ないと読み解くことが困
難になるので、知りたい。

コメント [y30]: どういう意味?

コメント [y31]: ヌースには「意図する、考案する」といった能動的なニュアンスがある。

コメント [y32]: 今回はそこまでは進んでいません。

今回の授業では、主にヌース、ロゴス、などの哲学の用語についての話であった。

まず、ヌースとは動詞のノエオーが名詞として表された言葉である。意味は英語の mind, a thought, purpose, resolve という意味である。日本語訳は理性、知性と表わされるという事が分かった。

次に、ロゴスとは動詞レゴーが名詞として表された言葉である。英語では The word by which the inward thought is expressed. The inward thought or reason itself. To recon, count などと訳される。日本語では理性、論理と訳されることが分かった。

また、古代ギリシャではロゴスは説得や論証の手段として意味であり、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力という意味であったということが分かった。

私は、今回ロゴスやヌースが日本語訳では理性、論理と分かりにくい表現であるが、英

語として表すと purpose のように意味が理解しやすいということが興味深い点であった。

ロゴスは、説得や論証の手段である。一方、ヌースとは、理解に基づいて何かを作り出す力である。こう授業で学んだ。私は、今まで、ロゴスという言葉は知っていたが、ヌースという言葉に関しては、初めて知った。この二つの言葉は混乱しやすいという話題になったが、私はこの説明を読んだり、先生の話聞いていても、普通に異なる二つの言葉だと言う認識しかない。

また、今までなぜこんなにも哲学用語が面倒だと思っていたのかが分かった。一つ言葉でも、ギリシア語やラテン語、英語といったようにさまざまな言語で訳されるからだ。特に、「理性」という言葉は私たちを一番困らせる。結局、理性とはどう解釈したらよいかさがさらに分からなくなってしまった。どの説明もとても抽象的すぎるので、これが哲学の難しいところである。

これはあなたの経験や感じたことだけを書いた感想文です。

今回の授業では、ギリシア語やラテン語、英語から日本語へ訳のまとめや、言葉のそもそもの意味を学んだ。ギリシア語のヌースは理性や知性、ロゴスは理性、アイステーシスは感覚、ラテン語のインテクトゥスは知性、ラチオは理性、センススは感覚、英語の Understanding は知性やカント後には悟性、Reason は理性、Sensation は感覚と訳される。また、古代ギリシアにおけるロゴスは説得や論証の手段であり、計算の道具であった。プラトンのディアクレーティケーは対話を通じて真理を得るものであり、アリストテレスのロゴスは一人で考える 力手段となる論理学 のことである。ヌースは理解に基づいて何かを作り出す力である。

私たちはこの、ロゴスを身につけるべきであるし、身につけられる環境下にある。人を説得したり、論証する手段は大学にある。一人で考えたり、調べたりできる環境も、対話できる友達も先生もいる。この大学での対話や考えをもとに、ヌースの能力を伸ばすべきである。また、ヌースの能力で何を作り出すべきかも大学で学んだことを活かし、作り出すべきである。

今回の授業の要点を私なりにまとめてみる。

理性は対話の中で育つ。十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をするこ

コメント [y33]: どういう意味？

コメント [y34]: 物事を理解し、それにもとづいてどうするか考えることです。

コメント [y35]: ヌースやロゴスといった言葉の語源を具体的に示したはずですが、どの点が抽象的だったのでしょうか？

と、別な立場や味方からの情報を得ることによって理性(思考力)は育つ。古代ギリシャにおけるロゴスとは説得や論証の手段であり、ヌースとは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。また、アリストテレスのいうロゴスとは論証という意味でなんらかの前提を出発点として論理で前に進むこと。ヌースとは何らかの前提を把握する能力である。

古代ギリシャにおいてもアリストテレスの主張においてもロゴスの意味に大きな違いはない。しかし、ヌースの意味に若干の違いが感じられる。ヌースとは「心」「精神」「理性」「知性」を意味するギリシア語。アリストテレスにおいてもヌースはわれわれのうちに存在する最高のものであると同時に不被動の動者としての神と同一視された(ヌースとはコトバンクより)。ここからわかるようにヌースはとても幅広い意味で使われている。その中でも心で考えて客観的に見ることに重きを置いているようだ。また、アリストテレスが神と同一視するほど最高のものであると表現したことから、「ヌース」という言葉の地位の高さがわかる。

参考文献 <https://kotobank.jp/word/%E3%83%8C%E3%83%BC%E3%82%B9-110977> コトバンク・ヌースとは

訳語の混乱がおこっている。それはドイツの哲学の本を日本が先に訳したのが原因だ。概念には順番があってそれを理解すると哲学の抽象的な言葉がわかりやすくなる。ヨーロッパ文明の起源はキリスト教なので、19世紀までは、ギリシャがヨーロッパ文明の起源ではないだとは考えられていなかった。十分な情報を得ること、その情報から妥当な判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理性的な見方が育つ。合理的な判断は感情ではできない。私は感情を理由にして物事を考えることがあったがこれからは落ち着いて考える。友人との喧嘩なども一時の感情で言い合ったりすることが原因だからだ。落ち着いて考えるためには時間が必要だ。哲学の授業を通して、理性的に考えるようになりたい。

断片の寄せ集めというか、具体的に何を学んだのかよく分かりません。

今日の講義では、大きく二つのことを学んだ。
一つ目は理性のことである。
理性というのは、十分な情報を得ること、その情報の中から妥当な価値判断をすること、別の立場や見方からの情報を得ることによって育つのである。
近代哲学では知性と理性の逆転が起こった。
二つ目はロゴスとヌースについてである。
ヌースというのはギリシア語であり、訳すと知性や理性といった意味がある。

コメント [y36]: アリストテレスは古代ギリシアの人です。

コメント [y37]: どういう意味か、理解できましたか？

コメント [y38]: どういう意味ですか？

コメント [y39]: どんな混乱ですか？

コメント [y40]: 具体的にどのような本をどのように訳したことが、その後の事態にどのような影響を与えたのですか？

コメント [y41]: どのような順番ですか？

コメント [y42]: 「落ち着くこと」と「理性」とは別です。

またロゴスもギリシア語であり、訳すと「理性や論理」という意味がある。

二つの違いはロゴスは説得や論証の手段であり、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。

ロゴスについてはアリストテレスも使用しており、簡単にいうと、ロゴスは計算のための道具である。

またヌースの方が上位であり、ロゴスを大事にしたのは古代ギリシャのアテネである。

箇条書き風です。もっと具体的な内容を書き込みましょう。

コメント [y43]: 理性や論理は具体的にはどのような意味ですか？

今回の授業では、ものを知り、理解し、考えるための3つの道具である、「ヌース」「ロゴス」「アイステーシス」について学んだ。ギリシア語のアイステーシスとラテン語のセンスと英語の Sensation の日本語訳はすべて「感覚」である。しかし、「理性」と日本語で訳するのは、もともと「ヌース」であったが、カントの本を先に訳してしまったがために、「ヌース」から「ロゴス」に変化した。

ヌースはそもそも、ただ単に考えるというだけでなく、目的や意図を考え、想像したり工夫したりするという意味がある。また、ヌースの動詞であるノエオーとラテン語のインテレクトゥスには識別するという意味がある。Understanding にはギリシア語やラテン語にはなかった「悟性」の意味も含まれている。

ロゴスはそもそも、ことばに関わることや話したこと全部を指す。また、ロゴスの動詞であるレゴーには秩序だって並べる、数を数えるという意味があり、計算の道具である。ロゴスは説得や論証の手段であり、古代ギリシア人は、to speak,say,utter の意味で使っていた。

コメント [y44]: どういう意味ですか？

コメント [y45]: どういう意味ですか？

理性は対話の中で育つ。十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や味方からの情報を得ることによって、思考力は育つ。アリストテレス以来の「知性 Intellect」は何を推論する、考えるべきかを考えるものである。19世紀からは感情は古来、道徳的に悪であると批判され続けてきたが、18世紀には感情をよいものとみなす思想が感情論というものがあらわれた。ヒュームの思想は、「理性は感情の奴隷」というキャッチフレーズで説明さかかれることもかる。人間が物事を理解する際の三大要素として理性(計算能力)知性(1番位が上)感覚感情(ネガティブなもの)が必要であるといわれている。ここ最近の時代では感情尊重社会が広まってきた。感情を表に出すこと、これまでは口に出すのをはばかるべきと考えられてきたようなことを口に出すことが、「本音をはっ

きり言う」などと高評価される。また感情は眼前の状況に対する反射的反應で、複数の立場を知ってしまったら怒りようがなくなってしまう。しかし、感情を表に出す程度を考えたところ、それは人種によって少し違ふと考える。

断片の寄せ集めのようなので、それぞれの文の具体的な意味内容をもう少し書き込んでください。

十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別の立場や見方からの情報を得ることによって理性(思考力)は育つ。つまり、理性は対話の中で育つのである。

現在の理性の意味と異なり、近代哲学における理性(Reason)とは理由をつけて推論する力や計算能力のことであった。また、アリストテレス以来の「知性(Intellect)」は何を推論すべきかを判断する能力を含むものであり、近代哲学において「知性と理性の逆転」が起こった。

そして、訳語の混乱が生じた。例えば、ギリシア語の「ヌース」は日本語では主に「理性」と訳され、ラテン語の「インテクトゥス」は日本語で「知性」と訳された。英語の「Understanding」は「知性」「悟性」と訳された。また、ギリシア語の「ロゴス」は「理性」「論理」と、ラテン語の「ラチオ」は「理性」と、英語の「Reason」も「理性」とそれぞれ日本語訳された。ギリシア語の「アイステーシス」、ラテン語の「センスス」、英語の「Sensation」は日本語で「感覚」と訳された。

言葉の起源は具体的なものにある。「ヌース」は動詞「ノエオー」と繋がっており、「to purpose,intend」という意味が、ロゴスは動詞「レゴウ」と関連して、「to reckon,count」の意味がある。

古代ギリシアにおけるロゴスは説得や論証の手段であり、ソフィストはロゴスの技術とはレトリケーで、説得術であるとした。アリストテレスの「ロギコス」はオルガノン(道具・機械的に作動する演算装置)だとした。それは、Logic(論理学)であった。

知り、理解し、考え、感じるといった順序があるが、それが逆転することもある。近代哲学で「知性と理性」の逆転が起こり、訳語の混乱が生じた。「ヌース」が「理性」で「ロゴス」も「理性」の意味を持つことがそれを示している。

5月18日の成績がmanabaに出していないのですが、出していない状態で正常なのでしょうか。

コメント [y46]: すみません、アップするのを忘れていました。あげておきました。

今回の講義は、ギリシア語の哲学用語の意味についてだった。まず、ヌースのそもそもの意味はpurposeやresolveである。由来となった動詞のノエオーは、to discern や to think、

to deem の意味があり、これらが to purpose や to intend という意味に変化している。このヌースはラテン語に変換されたとき、インテレクトゥスと訳された。インテレクトゥスは understand, perceive, discern, recognize の意味がある。次に、ロゴスはギリシア時代にすでに多義的であった。由来となった動詞のレゴーは、to reckon や to count の意味があり、次第に to speak, say, utter という意味に変化している。ロゴスはラテン語に変換されたときラチオと訳された。ラチオの由来となった動詞の reor は reckon, calculate, think, deem, judge の意味がある。古代ギリシアにおけるヌースは、理解し理解に基づいて何かを作り出す力、ロゴスは説得や論証の手段でどちらかといえば計算の道具といえるものであった。

本日は、「理性は対話の中で育つ」ということを正しく理解するために、理性をギリシア語、ラテン語、英語を用いて学習した。

まず、ギリシア語のアイステーシス、ロゴス、ヌースはそれぞれ感覚、論理・理性、理性・知性と和訳される。そして、人は色の前にもものを見ているというパーセプションのため、アイステーシス、ロゴス、ヌースという順で起こる。しかし、ギリシア語とラテン語・英語の和訳はねじれている。

そこで、そもそもの意味が提示された。ヌースは purpose や resolve といった目的という意味であるが、動詞のノエオーは「区別のために見る」「気にかける」「工夫して作る」と移り変わっている。一方でロゴスは、the word by which the inward thought is expressed と考えを表した言葉という意味であるが、動詞のレゴーは「あやす」「秩序立って床に並べる」「拾って数える」「口に出す」という意味がある。多義的だが、悟性と訳されたことが理解できる。

また、ラテン語ではそれぞれ、インテレクトゥス、ラチオと訳される。インテレクトゥスは英語で understand と訳されたが、行間を読むのように「見分ける」という意味がある。また、ラチオの動詞では、ヌースとロゴスの両方の意味を持つ。

古代ギリシアにおいてロゴスは、存在論発祥のパルメニデスに対して説得したゴルギアスに代表されるソフィストの説得手段であった。しかし、真理を得るための対話が必要であるというプラトンの弁証術となる。さらに、アリストテレスは機械的という意味を加え、計算道具とした。アリストテレスを先祖として論理学は、12~13 世紀に発展した。一方、古代ギリシアにおいてヌースは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力とされた。アナクサゴラスやアラビア哲学、スコラ学において考えられた。

ここで、なぜ古代ギリシアにおける **ロゴスとヌースの意味**は、Greek English Lexicon のそもそもの意味に一致していないのか。古代ギリシアにおける意味だけではなく、他の時代の意味も含めているのだろうか。

コメント [y47]: 言葉の「意味」と、その言葉で指されているものがどのように使われたのかは、別です。たとえば、「犬」という言葉の意味と、犬という動物を番犬に使うか食用に使うかということとは別でしょう。

今回は、理解し考える力というテーマの授業だった。特に、言葉についての説明が主であった。

まず、ギリシア語のヌースという言葉についてである。ヌースには **purpose** や **resolve** などの意味があるが、これだけでははっきりとはわかりにくい。そこで、動詞に当たるノエオーという言葉を見てみると、「分かる」や「考える」、「意図する」といった意味であることがわかる。

次に、ヌースと同じギリシア語の、ロゴスという言葉である。こちらも動詞に当たるレゴーという言葉を見ると、「計算する」や「数える」という意味である。

更に、ヌースはラテン語ではインテクトゥスと言い、英語では **understand** に当たる言葉である。ロゴスは、ラテン語ではラチオと言う。これらのラテン語でも、動詞を見てやることによってその意味がよりわかる。

これよりわかるのは、物事はまず具体的なものから見ないと理解できないということだ。ここでは動詞を見たが、動詞を見ることで抽象名詞の意味がわかる。つまり、抽象名詞の意味がわからないときは動詞を見るとよいということだ。

また、古代ギリシアにおいては、ロゴスとは説得や論証の手段であり、計算道具のことである。そして、ヌースは、理解に基づいて何かを作り出す力のことである。しかし、ヌースはラテン語ではインテクトゥスと訳されるが、実際ラテン語では十分に継承されなかった。

今回、ほとんど馴染みのない言葉を扱ったが、抽象名詞がわからない場合は動詞を見るとよいというのは非常に納得できた。また、それは他のことにも応用できる。漠然としたものがわからないときは、その具体例や内容を見てみることで、そこでの意味を拾い上げ、理解に繋がるからである。

「言葉を理解する」とはどういうことなのか、というところまで理解してくれたらありがたいですね。

今回の講義は哲学における難解な用語、その起源と成り立ちについての紹介と特にヌースとロゴスについての解説がされた。

哲学を学ぶにおいて、恐らく多くの人にとっての障害となるであろう難解な哲学用語。それらは長い時代を経て多くの言語に訳されていく中で、少しずつ意味のずれが出てきてとうとう日本には明治時代に西洋からもたらされた。この時西洋からやってきた哲学用語の多くを訳したのが西周という人物である。「Philosophy」という単語を訳して哲学という単語を生み出したのも彼であるし、その功績から日本近代哲学の父ともいわれている。彼

の翻訳した単語が現代人にはどうにも小難しく思えるのは、彼が漢学と儒学について見識が深かったためである。(というより当時の知識人にとって漢学と儒学の素養は必須の条件であった)。彼は福沢諭吉、森有礼らとともに制作した『明六雑誌』にて「いわゆる学術なるもの、七、八年前まで四書・五経の範囲に出でず」と述べている。ここから当時の知識人にとって漢学、儒学の知識は一般常識であったことがわかる。ならば、日本における哲学用語が現代人にとって難解な理由もうなずける。それが長い間変化することなく現代まで受け継がれ勉強されてきたのだろう。

哲学用語も本当は英語などで意味を見てみたらとても理解し易いのである。我々は哲学というものが実際は考えているよりもとても簡単だということを伝えていかなければならない。柔らかくなって現代人に身近になった哲学書も見てみたい。

書いてあることはその通りですが、出典を記してください。

本日の講義は古代哲学における言葉の説明であった。大変申し訳ないのだが、浅薄な知識の私には全く理解出来なかった。

何が理解出来なかったかという、まず結局どの言語のなんという言葉がどのような変遷でどんな日本語の意味へと変わっていったのかということが分からない。プリントの表を見ても先生の話聞いても頭の中がこんがらがってしまったりか理解にくるしん苦しんでしまった。ただ、ここは私の理解力不足が原因なので先生に全く落ち度はなく今後私が質問なり本を読むなりして行くことで解決できる。

問題はこの言葉の意図の誤差を学ぶことに何の意味があったのかということである。こんな事を言い出せば本末転倒なのだが、今までの思想は現代の社会における政治などにも生きていました。学問は絶対何かに活かされなければならないという理論に対して私は必ずしもそうであるべきだとは思わないが、今回の講義の内容はどちらかと言えば言語学的内容に近く哲学の授業で取り扱う必要があったのか大変疑問である。

先生の講義内容にケチをつける訳では無いが個人的に哲学では思想を学びたいのでそういう内容を増やしていただきたい。また今回のような難解な内容はレジメをもう少し優しいものにして頂けると大変助かる。

今回の授業は「理性」についての授業だった。理性とはもともとギリシア語のヌースという言葉日本語訳したものである。しかし現代ではギリシア語のロゴスや、ラテン語のラチオという言葉理性と訳出している。これはカントやロックの著書を日本語に訳したときに生まれた差異が原因である。

コメント [y48]: まずはプリントをしっかりと読み直して、整理してみたらよいのではないですか。このコメントの宿題は、そういう作業をするきっかけにするために出しています。

コメント [y49]: 思想は言葉でできています。まずは哲学用語をきちんと理解しないと、浅薄な理解になってしまいます。学問は積み重ねですから、いきなり応用編を学ぶことはできません。地道に苦しい勉強をしなければならぬ場面もあります。

コメント [y50]: 「もともと～現代」というような時間差はありません。すべて、明治時代に訳された言葉です。

理性とは自分一人で考えて答えを出すものだと主張していた人々と、プラトンアリストテレスのように会話の中で答えを見つけていくものだと主張していた人々がいた。後者の中には相手を説得するためのレトリケーと呼ばれる説得術や、プラトンのディアレクティケーと呼ばれる弁証術が存在したが、ロゴスとは機械的に作動する演算装置として考えられていた。また、ヌースについて中世世界では理解し、理解に基づいて何かを作り出す力としてとらえられていた。

今回の授業について私は、ギリシア語やラテン語の文献や言葉を翻訳するときに一度英語に翻訳してから日本語に翻訳し直すの弊ではなく、直接日本語に翻訳すべきだという意見を持った。それは翻訳という作業を挟むことで、本来の言葉が持つ微妙なニュアンスの差が広がってってしまうからだ。

理性は対話の中で育つ。十分な情報を得て、それから妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることで理性=判断力は育つ。

現在、Understanding を理性(悟性)、Reason を理性と訳すが、本来理性に当たるギリシア語は「ヌース」であった。それが訳語の混乱により、Reason の語源であるラテン語の「ラチオ」が理性と訳されてしまった。ヌースのそもそもの意味は動詞「ノエオー」から来ており、a thought, purpose, resolve の意味がある。

ロゴスの語源は動詞「レゴウ」からきており、to reckon, count, tell or reckon up という意味を持つ。

次にラテン語について。日本語訳で「知性」と訳される「インテレクトゥス」は intel-lego から来ており、「間+選ぶ・読む」という意味を持つ。英訳すると、understand/perceive, discern, recognize となる。

続いて古代ギリシアにおけるロゴスとヌースについて。ロゴスとは説得や論証の手段である。ソフィストは「ロゴスの技術=レトリケー」=説得術としたが、説得できれば良いのかと言われればそうではなく、真理≠説得なのである。

ヌースとは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことであり、アナクサゴラスはこれを「万物の秩序の原因」とした。

アnakサゴラスとは BC.500 頃の人物である。彼は「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。彼の言う種子は人間は認識することはできず、宇宙ないし神の「知性」が種子を認識し混合するとした。

最後にアリストテレスの考えるロゴスとヌースについて。彼はロゴスを論証とした。何らかの前提を出発点として論理で前に進むと言う解釈をした。

そしてヌースを何らかの前提を把握する能力として捉えた。これは基本的に、外界に対応する受動的な働きである。

コメント [y51]: 真理の探究ではなく、相手を説得するための技術。

コメント [y52]: 普通はそうしています。今回は、さまざまな言語でどのように翻訳されていったのかを見ました。

コメント [y53]: ここから先はまだ授業ではやっていません。

ヌースは日本語訳で「理性」と訳されていた。そこで古代ギリシアやアリストテレスの言うヌースを考えてみると、何かを作り出す能力であったり、何らかの前提を把握する能力は理性であると考えられるので、それらは対話の中で育っていくのである。十分な対話を重ねることが情報の価値判断能力や思考力などを培っていくポイントなのである。

今回の授業では、主にヌース、ロゴスについて学んだ。

そもそもの意味について、ヌースは目的を考えることであり、動詞のノエオーはよく見て他のものと区別する、つまり新しいものを工夫して作り出すことだ。ロゴスは頭で考えを表現した言葉、つまり、話したことすべてである。ロゴスの動詞のレゴーは多義的で、総括して言えば自分で何かするぞという意味だ。

古代ギリシアにおけるロゴスとヌースにおいて、ロゴスはアリストテレスの「ロギコス」=オルガノン(機械的に作動する計算道具みたいな存在)とされる「Logic」が由来となっている。ヌースにおいては、対話を通じて話を聞き、理解に基づいて何かを作り出す力である。

今回の授業では理性ということ学んだ。しかし、今回は理性について詳しく学ぶために「理性」という言葉の意味、語源を学習した。

哲学を学ぶにおいて、言葉の意味、語源を把握することは大切なことである。なぜならば、哲学で使われる用語には、私たちが日常的に使っている意味と異なることがあるからだ。例えば、「認識」という言葉には日常的に用いられる意味としては「ある物事をしり、その本質・意義などを理解すること(1)」がある。しかし、哲学的な意味では、「意欲・情緒とともに意識の基本的な働きの一つで、事物・事柄のなんであるかを知ること(2)」である。

今回は、ギリシャ哲学から哲学用語の本来の意味を探っていった。ギリシャ語での「ロゴス」という言葉は日本語では「理性・論理」と訳されている。また、ギリシャ語での「ヌース」とい言葉は日本語では「理性・知性」と訳される。ここで、同じ言葉である「理性」が二つ出てきた。これらそれぞれの「理性」の意味を見ていく。

「ロゴス」の古代ギリシアにおける意味は、説得や論証の手段であった。また、「ヌース」の古代ギリシアにおける意味は理解し、理解に基づいて何かを作り出すことであった。

このように、学問、特に昔のことについて研究する際にはその当時に用いられていた意味を把握することが大切である。言葉の意味は、同じ言葉であっても意味が変わっていくからだ。現代の常識に当てはめずに、当時の常識で研究を進めていくことが研究することの基本である。今回はその手法について学んだ。

理性は自らの思索のみでは培われず、他者との対話を通して育まれる。十分な情報から価値判断を行うべきである。反対意見や異なる視点からの意見を知ることによって理性は成長する。ロゴスは説得や論証の手段であり、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。日本語に訳す過程で知性などと混同されてしまった。

真理ではなく、真理のように思えるものを論じて大衆を説得するソフィストの手法は忌避されるべきものである。水素水のような似非科学に通じるものがある。プロタゴラスの「人間は万物の尺度である」という言は、山口教授のおっしゃる「人それぞれ」と同じで、真理に至っているように見せかけて対話を否定するものだ。対話の否定とは理性の否定である。これを回避するにはどうするべきか。やはり、個々人が十分に情報を得て、価値判断を行うことだ。

十分な情報を得ることや、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理性は育つ。近代哲学における理性(Reason)=理由をつけて推論する力。アリストテレス以来の「知性(Intellect)」は何を推論すべきかを判断する能力を含む。

私は、高校で倫理を習っていたため哲学には少しの知識と興味がある。そこで、先生はいつも日本語の「理性」であれば、ギリシャ語で「ヌース」ラテン語で「インテレクトゥス」など訳語を交えて授業を行っているが、それはいつのまにか知識として身につけているのでしょうか。また、調べているのであれば、どういう調べ方をしているのでしょうか。自分で調べると言われればそこまでですし、ネット調べればいいのは分かっていますが、Wikipediaはあまり参照しない方がいいし、どのサイトが正しいかわからないので、ネットで調べているのならそのサイトを教えてください。また、本で調べているのなら、図書館に所蔵しているかなどを教えてください。

授業の内容についてもう少しまとめを書いてください。

今回の授業ではまず、理性は対話の中で育つということを学んだ。これは、十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって理性は育つということである。ここで理性について少し触れておくと、近代哲学における理性は、理由をつけて推論する力、または計算能力を意味する。しかし、アリストテレス以来の「知性」は何を推論すべきかを判断する能力を含む。つまり、近代

コメント [y54]: なぜ忌避されるべきなのか、理由を説明してください。

コメント [y55]: なぜそうするべきなのか、理由を説明してください。

コメント [y56]: 哲学の専門学科では、普通は原文で読みます。

コメント [y57]: きっかけとして使うのはよい、と説明しました。

コメント [y58]: 古典的な哲学文献は、著名なものであればたいがい Wikisource で公開されています。

たとえば、アリストテレスであれば、
<https://en.wikisource.org/wiki/Author:Aristotle>

デカルトなら、
[https://fr.wikisource.org/wiki/Auteur:René Descartes](https://fr.wikisource.org/wiki/Auteur:René_Descartes)

また、Bibliothèque nationale de France では、貴重な初版本なども、写真で全ページ公開しています。ただし読みにくい。

哲学では知性と理性の逆転が起こっているのである。

ギリシア語のロゴスは、理性・論理と日本語で訳されているが、古代ギリシアにおけるロゴスとは、説得や論証の手段であった。ソフィスト達は、ロゴスの技術は説得術であるとしていた。しかし、説得できれば良いのかといえばそうではなく、説得と真理はまた別の問題だったのである。ほかにも、ギリシア語のヌースは理性・知性と日本語で訳されているが、古代ギリシアにおけるヌースとは、理解し、視界に基づいて何かを作り出す力という意味であった。そのことは、アナクサゴラスの「万物の秩序の原因」にも示されている。アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子は人間には認識できず、宇宙ないし神の「知性」が種子を認識し混合するという考え方を持っていたのである。

アリストテレスにおけるロゴスとヌースは、古代ギリシアのものとは少し異なっている。アリストテレスのロゴスは、論証を意味し、何らかの前提を出発点として論理で前に進むことを意味する。ヌースは何らかの前提を把握する能力を指し、基本的に外界に対する受動的なはたらき、つまり受動的な知性を意味する。

同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているが、そもそもの意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要である。

コメント [y59]: 翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みです。

今回の授業の内容はこのようなものであった。理性とは対話の中で育つものだ。十分な情報を得て、その情報から妥当な価値判断をしたり、別な立場や見方からの情報を得たりすることによって理性は育つ。近代哲学における理性とは、理由をつけて推論する力や計算能力のことである。

これはギリシア語が元になっているのだが、ギリシア語とラテン語と英語の日本語訳の混乱が起こっており、誤認が起こりやすい。古代ギリシアにおけるロゴスとは、説得や論証の手段を指す。そしてヌースとは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことである。だが、アリストテレスの解釈としては、ロゴスとは何らかの前提を出発点として論理で前に進むことで、ヌースとは何らかの前提を把握する能力である。我々は、このような語の意味するところを理解して哲学を読み解かなければならない。

コメント [y60]: どのような混乱ですか？

コメント [y61]: それぞれの語の「意味」は何ですか？（どのような使い方をするか、ということと、「意味」とは別です）。

今回の授業は再び理性などについてのものとなり、理性、知性、感性と言った言葉のギリシア語、日本語、ラテン語、英語での訳や意味が紹介されながら、それぞれの言葉について考えていく授業だった。授業では様々な言葉が紹介されたが、特にロゴスとヌースについて、ロゴスは説得や論証の手段、ヌースは理解し、その理解に基づいて何かを作り出

す力であるということが強調して紹介されていた。

「理性は対話の中で育つ」ということも授業の中では言われていた。ロゴスとヌースは同じように理性と訳される。ロゴスは説得や論証の手段として用いられるものである所以对話の中で育つのは妥当である。また理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であるヌースも対話の中で育つ。この2つの理性は「どちらが早く育つのか」を考えた場合、ヌースが何かを「作り出す力であるなら、ヌースが先に育つことでそこから手段であるロゴスが生まれ、それからロゴスを対話の中で用いることでロゴスが育っていくのである。

今回の講義を通して、理性は対話において十分な情報を得、その情報から妥当な価値判断をすることや違う観点、視点からの情報を得ることにより育っていくということが分かった。

また、アリストテレスは自分の頭の中で考え抜けば理性は育つという主義で、「ヨーロッパの学者もその傾向が強いことに強い反感を抱いた」。なぜなら自分一人で考え抜くと、一度間違った方向に走り出してしまうと誰も止めてくれる人がいないので「暴走」してしまうからだ。そのため、古代ギリシアの哲学者ソクラテスが用いた問答法(ディアレクティケー)はとても大切なことである。

今回の授業では、ギリシャ語のヌースという言葉の「訳語が混乱」してしまったという事実を知った。また、ヌースには **perpose**、**resolve** 等、理解し、理解に基づいて動く能動的な意味があったとわかった。しかし、それから見分ける、判断するなど能動的とはまた違うような解釈になっていき、微妙に訳語の混乱が生じていったとわかり、言語の側面からも思想において多岐にわたる方向へ進んでいったのだと読み取れた。

今回の授業では、知性、理性、感覚についてであった。ギリシア語、ラテン語、英語でのそれぞれの言葉を日本語に訳すと異なったものとなる。

ギリシア語でヌースを日本語に訳すと理性、知性になる。ヌースはそもそも動詞のノエオーからきている。ノエオーは考えたり、区別したりすることであり、ヌースは目的を考えることである。古代のギリシアで、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であった。また、ラテン語ではインテクトゥスであり、日本語に訳すと知性になる。インテクトゥスは知覚する、認識するという意味である。これは、英語では **Understanding**

コメント [y62]: なぜこのことを考える必要があるのか、説明してください。

コメント [y63]: どうして「ヌースが作り出す力」だと、先に育つのか、理由がよく分かりません。

コメント [y64]: そのようなことは言っていない。むしろ西洋哲学では、理性は普遍なので一人で考えてもみんなでも考えても同じ結果が出る、という考えの方が主流です。

コメント [y65]: 具体的に何がどうなるのですか？

コメント [y66]: 具体的にどのように混乱したのか説明してください。

になる。

また、ギリシア語でロゴスを日本語に訳すと、理性や論理になる。ロゴスは動詞のレゴ-からきている。レゴ-は横になる、あやす、数をかぞえるといった意味があり、ロゴスは考えを表現したことばすべてである。古代のギリシアで、ロゴスは説得や論証の手段であり、計算の道具であった。また、ラテン語ではラチオであり、日本語に訳すと理性となる。ラチオは計算や説明、方法といった意味である。これは、英語では Reason になる。

このように、ギリシア語、ラテン語、英語のそれぞれを日本語に訳すと、混乱してしまう。これは、ドイツのカントの哲学を先に訳し、その後英文学哲学を訳したからである。

今回の講義は、第五回に取り扱った「理性」と「知性」の関係についての話に続く形で始まった。アリストテレス以来、「知性(intellect)」を得ることで「理性(reason)」が育つとされていたが、西洋の近代哲学において、「理性」と「知性」の因果関係が逆転してしまった。また、日本の近代哲学においては、これら哲学用語の訳の混乱が起きていた。何故、このような問題が起きてしまったのか、そして、そもそもの「知性」と「理性」の意味とは何か、という話が今回の講義のテーマであった。

そこで、どちらの謎も解き明かすために哲学用語の歴史についての検討が行われた。両用語ともその起源はギリシア語まで遡る。ギリシア語では、「ヌース(Nous)」、「ロゴス(Λόγος)」がそれぞれ「知性」、「理性」の意味に当たる。そしてこれは、ラテン語で「インテレクトゥス(Intellectus)」、「ラチオ(Ratio)」と訳す。注目すべきは、この段階で意味の交錯が起きていたことだ。

「ヌース(Nous)」は、「-mind(lat. mens←memini=memory)、- a thought, purpose, resolve、- the sense or meaning of a word or expression」を意味し、又動詞化した「ノウエオ(Noéō)」は「-to see so as to remark or discern, distinguished from merely seeing、- to think. to be minded.、-to purpose, intend. - to think out, devise, contrive.、- to think or deem that a thing is so and so.」を意味する。同様に「インテレクトゥス(Intellectus)」は、「動詞 intel-lego(=「間+選ぶ・読む」):understand / perceive, discern, recognize.」を意味する。

ここで問題なのはラテン語の「lego」は「ロゴス(Λόγος)」の動詞化「レゴ-λέγω」を意味していることだ。つまりギリシア語からラテン語に訳すとき、**厳密な翻訳**が行われなかったのだ。これが原因となって、哲学用語の訳の混乱が起きてしまった。

次に、上記の事実を踏まえて、古代ギリシアで使われていた「ロゴス」と「ヌース」の意味についての説明がなされた。

古代ギリシアに於いて、「ロゴス」とは説得や論証の手段を意味する。この時代の哲学者であるソフィストは、ロゴスの技術(説得術)を高めようとしていた。しかし、彼らは物事の

コメント [y67]: レゴ-という言葉は、ギリシア語からラテン語に入ったのではなく、インド・ヨーロッパ祖語からそれぞれギリシア語、ラテン語に入ったらしい。

コメント [y68]: 別な言語なので、「完全一致」は難しい。元の言語でどういう意味で使われているかをよく調べたうえで、もっとも近い言葉にするか、新しい言葉を作ることです。

心理に辿り着くよりも、相手を納得させることに力を注ぐことを重視してしまっていた。そこで、プラトンは「ディアレクティケー(弁証術)」、アリストテレスは「「ロギコス」=オルガン(道具・機械的に作動する演算装置)」をそれぞれ重視し、物事の心理に辿り着こうとしていた。

また、「ヌース(Noûs)」は「理解し、理解に基づいて何かを作り出す力」を指す言葉だった。この力を追い求め、この時から中世に渡り、様々な研究がなされた。代表的なものは、アナクサゴラスの「万物の秩序の原因」、アリストテレスの「能動知性と受動知性」アラビア哲学に於ける「神の知性と人間の知性」、そしてトマス・アクィナスの「概念を抽象する能動知性」などである。

コメント [y69]: ここから先は授業ではまだ取りあげていません。

「理性」とは論理的な思考能力,計算能力のことである。ギリシア語で「ヌース」,「ロゴス」はそれぞれ日本語で「知性,理性」,「理性,論理」である。ラテン語では「インテレクトゥス」,「ラチオ」であるが,これを日本語に訳すと「知性」と「理性」である。訳語がねじれており,日本語で考えたとき理性と知性というのはもともと何だったのかを勘違いしてしまいがちである。

「ヌース」は物事を理解し,理解に基づいて何かを作り出す力,「ロゴス」は説得や検証の手段である。日本語で「理性」は計算能力を表すので,本来どちらの語にも含まれている。しかし,ラテン語に訳したとき,片方が抜け落ちてしまっているのだ。

「ヌース」,「ロゴス」,はもうひとつずつ「知性」,「論理」という意味ももつ。つまり「ヌース」を成立させるために「ロゴス」を用いている,あるいはそれが必要であるともいえる。

今回の授業で大事だったことは、理性・知性は具体的に何なのかをもとのギリシャ語から考えることであった。つまりヌースやロゴスとは何かである。日本語で理性と訳されるものはギリシャ語ではヌースであった。ヌースは意図や目的である。また名詞は動詞からきているものが多い。そのため、その名詞の動詞の意味を確認することでさらに具体的にイメージできることも学んだ。ヌースの場合はノエオーである。ノエオーはほかのものあるものを区別するためによく見るという意味である。またこしらえるという意味もある。したがって、理性は何かをしようと思ひ、新しいものを工夫して作り出すことである。またほかのものとの区別するためによく見るということは実際にできる。そして実際にできることは理解することができるということも学んだ。

次に日本語で理性や論理と訳されるロゴスである。ロゴスは考えを表現した言葉すべてである。さらに動詞のレゴーンは数を数えるという意味がある。したがってロゴスはものを

ねかして、それを数え上げて(計算して)しゃべって考えるというものである。

そしてヌースのラテン語にあたるものはインテレクトゥスである。これは行間を読む問意味で英語では **understand** で知りたいことの下にすっと立つイメージなのかもしれない。ちなみに **understand** は下に立つであるが、ギリシャ語の知識はエピステーメであり上に立つという語源である。

最後に古代ギリシアでのロゴスとヌースの使い方の変遷をたどった。ロゴスは説得や論証の手段であった。ソフィストは説得術(レトリケー)として使い、真理と説得は違うのではないかという点に目を向けたソクラテスは殺され、それを引き継ぐプラトンは弁証術(ディアレクティケー)を説き対話を通じて真理を探究する道に進んだ。そしてプラトンの弟子のアリストテレスはどちらかという対話をしないタイプであり、機械的に作動する演算装置としてロギコスが生まれた。これは今でいう論理学(logic)である。一方ヌースは理解に基づいて何かを作り出す力であった。

今回の授業では背景的な知識をたくさん持つ人になることも重要であると学んだ。

今回の哲学の講義では、前回から引き続き「理性」について学んだ。その内容は主に、ヌース・ロゴス・アイステーシスの訳語と言葉の意味を詳しく勉強するものだった。

ものを知り(知覚し)、理解しそこから考える、この順番でいうとアイステーシスがまずあって、その次にロゴス、そのロゴスを使ってヌースする、といった工程である。思考する過程でいうと、一番ヌースが高次のものだ。

このロゴスやヌースなどのような、言葉自体の意味が多義的で抽象的な言葉の場合、その言葉のもとになった動詞などを調べてみると良い。それは、抽象名詞が動詞からできていることが多いからだ。意味のとりにくい抽象的な言葉でも、その言葉のもとものは、大体具体的な意味や内容であることが多い。

そこで、言葉の意味と元の動詞の意味両方を考えていくと、まずアイステーシスは感覚の意味である。また、ロゴスの根本的な意味は「言葉に関わること全て」と言える。つまり、自分の考え(思考したこと)を表現する言葉そのものということである。このロゴスのもとになったレゴウという動詞は、基本的に「数える」という意味の動詞だ。そこから、配列する・集める・話すという風に派生した。

次にヌースだが、この言葉は「目的・解決」などの意味がある。ヌースの元の動詞はノエオーと言って、「何かしようと目的を考える」という意味のある語だ。そしてヌースは他の二語に比べて、一番「能動性」がある言葉である。

そして忘れてはいけないのは、ロゴスはあくまで物事を考える際の「計算道具」といったようなもので、そのロゴスを使ってヌース、つまり正しい理解に基づいて何かを作り出すこと、が目的であるということだ。

理性(思考力)は、十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場や見方からの情報を得ることによって育つ。また、近代哲学における理性(reason)は理由をつけて推論する力や計算能力のことであり、アリストテレス以来の「知性 intellect」は何を推論するべきかを判断する能力を含む。そして、ギリシャ語のヌースとは日本語訳では、理性・知性のことであり、同様にロゴスは理性・論理、アイステーシスは感覚(知覚)のことである。また、ラテン語のインテレクトゥスは知性、ラチオは理性、センススは感覚のことである。そして、古代ギリシャにおけるロゴスのは、説得や論証の手段であり、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であり、一方で、アリストテレスにおけるロゴスは、論証=何らかの前提を出発点として論理で前に進むことであり、ヌースは何らかの前提を把握する能力のことである。

今回の講義でロゴスとヌースの基本的な意味を学んだ。ロゴスは英語で **the inward thought or reason itself**、日本語で内側にある考えという意味である。ロゴスはレゴ-の名詞形であり、レゴ-の意味は子守をするという意味だ。また、ヌースは、**mind, a thought**、考えという意味であり、動詞形はノエオである。ノエオは、**distinguish from merely seeing to thing**、見えるものと考えを区別するという意味である。私は哲学に対しても浅い知識しか持っていないが、一つ疑問に思ったことがある。それは、哲学にとってロゴスとヌースがなぜ大事なのかということである。高校で教わったときも意味だけ教えられ、なぜ重要なのかを教わることはなかった。この機会に**ぜひ知りたいものだ**。

コメント [y70]: 何を知りたいのか特定し、まずは自分で調べてみましょう。

理性や知性と目に見えたり、触れることのできる物体でないもの、抽象的な概念をあらわす言葉について、**素因数分解**していくという方法での語源や意味の追求は、わかりやすく、納得がしやすかった。

コメント [y71]: 素因数分解ではありません。

結局、アリストテレスの文章は難しく何をどう考えていたかはわからない、と**あった**が、研究者たちは今回の講義と同じように、アリストテレスの書に使用されている語を分析して思想を理解しようとしたのか、それとも何かまた別の方法でアリストテレスの文や抽象概念について理解をしたのか。

コメント [y72]: どこにあったのですか？

具体的な内容が全く含まれていません。